新幹線文化財調査事務所調査報告書　第２集

九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

Ⅱ

平　野　遺　跡

２０１７

長崎県教育委員会

新幹線文化財調査事務所調査報告書　第２集

九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

Ⅱ

平（ひら）　野（の）　遺　跡

（国土地理院電子国土 web より作成）

２０１７

長崎県教育委員会

中表紙写真　国土地理院電子国土 web

URL：

http://maps.gsi.go.jp/?ll=37.666429,135.373535&z=5&base=std&cd=f0%2Ff0_10&vs=c1j0l0u0&d=l#5/33.092646/130.402879/&base=std&ls=std%7C_ort&disp=11&lcd=_ort&vs=c1j0l0u0f0

調査区遠景　西から

調査区全景

序　　文

本書は、九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書として、平成25年度に実施した平野遺跡の調査成果を収録したものです。

平野遺跡の調査では、縄文時代から近世にかけての遺物が出土しました。また、太平洋戦争当時の米軍の空爆による20ポンド爆弾の不発弾が13個体発見されました。これらの発見と詳細な観察により、縄文時代から近現代までの竹松地区の歴史をたどる事ができました。

県教育委員会は、これまでも各種開発事業において、協議・調整を重ね文化財保護に尽力してまいりました。九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設事業につきましても、建設計画当初より可能な限り保存に努めていただくよう独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構および関係機関との協議を重ねた結果、建設工事に係る遺跡を記録保存する運びとなりました。

本書を刊行するにあたり、鉄道建設・運輸施設整備支援機構、発掘調査に携わった方々をはじめ、多大なご尽力・ご協力をいただきました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

また、本書を文化財保護ならびに地域の歴史を学ぶ資料として活用していただければ幸いです。

平成 29 年 2 月

長崎県教育委員会教育長
池　松　誠　二

例　　言

1　本書は平成25年度九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設工事に係る平野遺跡の発掘調査報告書である。

2　本調査区は大村市鬼橋町160番地１に所在する。

3　平野遺跡の本調査の出土遺物の洗浄・分類・注記・接合、遺物台帳の作成、報告書掲載遺物の実測は新幹線文化財調査事務所竹松および久原現場事務所において行った。

4　本調査での現場記録は本田の指示の下、写真撮影・実測図作成を調査員が行った。

5　本報告書の作成は浦田と文化財調査員堀内和宏・東郷一子とで行った。また、主任文化財保護主事白石渓冴の協力も得た。

6　本報告書の執筆担当者は本文目次に（　）で示している。

7　本報告書の掲載遺物の撮影は浦田が行った。

8　本報告書の編集は浦田が行った。

9　本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。

　ピット…SP　溝…SD

10　本書の作成にあたり以下の文献を土器等の編年の基礎資料として用いた。

縄文土器：水ノ江和同『九州縄文文化の研究』雄山閣2012

弥生土器：柳田康雄『九州弥生文化の研究』学生社2002

甕棺　　：橋口達也『甕棺と弥生時代年代論』雄山閣2005

土師器　：柳田康雄「九州土師器の編年」『九州弥生文化の研究』学生社（初出1991）2002

須恵器　：舟山良一編『牛頸窯跡群　総括報告書』大野城市文化財報告書第77集2008

貿易陶磁：山本信夫『大宰府条坊 XV』（太宰府市の文化財第49集）太宰府市教育委員会2000

瓦質土器：荻野繁春『解説　東播産須恵器系陶器の編年』私家版1988

石鍋　　：木戸雅寿「石鍋の生産と流通について」1993（中世土器研究会編1993『中近世土器の基礎研究Ⅸ　中世前期の流通』所収）

11　本書で用いた座標は世界測地系である。

12　本書で用いた方位は座標北である。

13　遺跡調査番号は HRN201305である。

本 文 目 次

Ⅰ　調査の経過
　1　調査に至る経緯
　　（1）九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）の概要
　　①概要……1（古門）
　　②沿革……1（古門）
　　（2）範囲確認調査
　　①調査区……5（浦田）
　　②土層……5（浦田）
　　③遺構・遺物……6（浦田）
　　④結果……6（浦田）
　2　調査組織……7（浦田）
　3　調査の方法……7（浦田）
Ⅱ　遺跡の立地と環境
　1　地理的環境……10（浦田）
　2　歴史的環境……10（浦田）
Ⅲ　調査の概要
　1　基本層序……11（浦田）
Ⅳ　遺構・遺物……14（浦田）
　1　2層の遺物
　　（1）土器……14（堀内）
　2　3層の遺物
　　（1）土器……17（堀内）
　　（2）器台について……21（堀内）
　　（3）石器……29（浦田）
　　（4）鉄鏃について……31（東郷）
　3　4層の遺物
　　（1）石器……34（東郷）
　4　出土層位不明土器……35（東郷）
Ⅴ　まとめ……36（浦田）
Ⅵ　附編　調査区出土の不発弾について
　1　調査区出土不発弾……37（浦田）
　2　大村の軍事施設の展開……38（浦田）
　3　大村への空爆……38（浦田）
報告書抄録

挿図目次

第１図　九州新幹線西九州ルート概要図…… 1
第２図　大村市北部の九州新幹線
　　西九州ルート建設に係る遺跡分布図… 4
第３図　範囲確認調査試掘坑位置図…… 5
第４図　TP12土層図 …… 5
第５図　グリッドおよびトレンチ配置図…… 8
第６図　平野遺跡調査区周辺地形図…… 9
第７図　平野遺跡周辺地形および遺跡分布図10
第８図　トレンチ１西壁土層図１……12
第９図　トレンチ１西壁土層図２・
　　トレンチ４北壁土層図……13
第10図　遺構配置図……14
第11図　２層出土土器実測図……16
第12図　３層出土土器実測図……19
第13図　３層出土器台実測図……21
第14図　有明海周辺地域出土器台１……26
第15図　有明海周辺地域出土器台２……27
第16図　器台変遷図……27
第17図　長崎県における肥前型器台の変遷…28
第18図　３層出土石器実測図１……30
第19図　３層出土石器実測図２……31
第20図　３層出土鉄鏃実測図……32
第21図　４層出土石器実測図……34
第22図　出土層位不明土器実測図……35
第23図　AN−M41　20ポンド破砕爆弾 ……37
第24図　不発弾出土位置図……37
第25図　遺跡周辺軍事施設図……38

表目次

表１　２層出土土器観察表……15
表２　３層出土土器観察表……18
表３　３層出土器台観察表……21
表４　周辺地域出土器台一覧表……24
表５　３層出土石器観察表……29
表６　長崎・佐賀・福岡県における
　　方頭式鉄鏃遺跡一覧……33
表７　４層出土石器観察表……34
表８　出土層位不明土器観察表……36
表９　成都からの空爆……39
表10　マリアナからの空爆……39
表11　沖縄からの空爆……39
表12　九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）
　　建設に伴う埋蔵文化財発掘調査履歴…40

巻頭図版１　調査区遠景　西から
　　調査区全景

写真目次

写真１　TP12北壁 …… 6
写真２　トレンチ１東壁……11
写真３　トレンチ４北壁……11
写真４　２層出土土器……16
写真５　３層出土土器……20
写真６　３層出土器台……21
写真７　３層出土石器１……29
写真８　３層出土石器２……31
写真９　３層出土鉄鏃Ｘ線写真 ……32
写真10　３層出土鉄鏃……32
写真11　４層出土石器……34
写真12　出土層位不明土器……35
写真13　調査区出土不発弾……37
写真14　不発弾出土状況……37
写真15　作業風景１……40
写真16　作業風景２……40

Ⅰ　調査の経過

1　調査に至る経緯

（1）九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）の概要

①概要

九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）は、福岡市と鹿児島市ならびに長崎市を結ぶ整備新幹線計画（九州新幹線）のうち、福岡市と長崎市を結ぶルートを指す。

博多駅～新鳥栖駅間（約26Km）は鹿児島ルートと路線を共有し、新鳥栖駅～武雄温泉駅間（約51Km）は在来線を活用する。武雄温泉駅～長崎間（約66Km）はフル規格の新線で、フリーゲージトレインを導入して2022年度内の開業を目指していたが、フリーゲージトレインの開発が遅れ、2022年度までの量産化が間に合わないことから、在来線と新幹線を乗り継ぐ「リレー方式」で2022年度内に暫定開業することとなった。

第１図　九州新幹線西九州ルート概要図（大村市 HP より）

営業主体は九州旅客鉄道（JR 九州）、建設主体は鉄道建設・運輸施設整備支援機構（鉄道・運輸機構）である。

車両基地は本県大村市の竹松町・沖田町付近に建設され、県内駅は長崎、諫早、新大村（仮称）である。

②沿革（長崎県ホームページを一部改変）

国鉄時代

1973年（昭和48年）

11月：全国新幹線鉄道整備法に基づく整備計画路線として決定、建設の指示。

1985年（昭和60年）

１月：博多～長崎間（早岐回り）の駅・ルートの概要を公表。

1986年（昭和61年）

９月：博多～長崎間（早岐回り）の環境影響報告書案の公表。

JR 九州発足後

1987年（昭和62年）

４月：国鉄分割・民営化（JR の発足）

10月：長崎市・佐賀市に着工準備作業所設置。

1992年（平成４年）

11月：新ルート案（短絡ルート）を地元案として決定。

1996年（平成８年）

12月：整備新幹線の新しい基本スキーム決定。上下分離方式により、JR は受益の範囲を限度とし

た貸付料を支払う。

1998年（平成10年）

１月：政府・与党整備新幹線検討委員会結果

武雄温泉から新大村（仮称）間の駅・ルート公表を速やかに行い、引き続き環境影響評価に着手するとともに、長崎駅の駅部調査を開始する。

２月：武雄温泉～新大村（仮称）間の駅・ルートを公表。

５月：長崎駅部構想調査の開始。

10月：武雄温泉～新大村（仮称）間の環境影響評価着手。

2000年（平成12年）

３月：長崎駅部構想調査委員会取りまとめ報告。駅位置、規模の大枠決定。

11月：環境影響評価準備書に対する知事意見の提出。

12月：政府・与党整備新幹線検討委員会結果（政府・与党申合せ）

武雄温泉～長崎間について、環境影響評価終了後、工事実施計画の認可申請を行う。

鹿児島ルートにおいて、交通結節点として、新鳥栖駅の整備を行う。

今回着工を行わない区間については、社会経済情勢、国・地方公共団体の財政事情等に照らし、東北新幹線盛岡・八戸間（H14年12月開業）及び九州新幹線新八代・西鹿児島間（H16年３月開業）の両区間の完成後に見直す。

2002年（平成14年）

１月：環境影響評価書（武雄温泉～新大村間）・（新大村～長崎間）の送付

工事実施計画認可申請（武雄温泉から長崎間）

2004年（平成16年）

12月：「整備新幹線の取扱いについて」（12月16日　政府・与党申合せ）において、「長崎ルートについては、並行在来線区間の運営のあり方について調整が整った場合には武雄温泉～諫早間に着工する」ことが盛り込まれ、平成17年度予算に10億円の事業費が配分された。

2005年（平成17年）

12月：平成18年度の整備新幹線予算の線区別の事業費が公表され、九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）の武雄温泉から諫早間に、平成17年度と同額の10億円の事業費が配分された。

2007年（平成19年）

12月：肥前山口～諫早間を経営分離せず、開業後20年間 JR 九州が運行維持することを佐賀県、長崎県、JR 九州の三者が基本合意した。

2008年（平成20年）

３月：国土交通省が鉄道・運輸機構に対し、武雄温泉～諫早間の工事計画を着工認可した。

４月：肥前山口－諫早間の鉄道施設の資産譲渡・維持管理に係る負担割合を佐賀県１対長崎県２とすることを確認した。

４月：佐賀県嬉野市で起工式を開催。終了後、諫早市で建設起工記念式典を開催。

11月：鉄道・運輸機構が大村鉄道建設所および武雄鉄道建設所を設置した。

12月：整備新幹線に係る政府・与党ワーキンググループが開催され、西九州ルートについては下

記のとおり合意がなされた。（概略）

（1）「新規着工区間」として、九州新幹線（長崎ルート）長崎駅部を、平成21年末までに認可する検討を進め、結論を得る。

（2）「その他の区間」として、諫早～長崎間について、引き続き検討を行う、なお、肥前山口～武雄温泉間の複線化等を進めることとし、さらにその具体化の方法の検討を行う。

12月：平成21年度の整備新幹線予算の線区別の事業費が公表され、九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）の武雄温泉から諫早間に50億円の事業費が配分されるとともに、新たに長崎駅部や肥前山口～武雄温泉間の複線化を検討する予算も計上された。

2009年（平成21年）

10月：国土交通大臣が前年12月の政府・与党合意の新規着工検討区間については、白紙とし、新しい政府・与党で整備のあり方を決めていくとした。

12月：「整備新幹線問題検討会議」が開催され、民間資金の活用、並行在来線維持のためのJRの協力・支援が必要とし、費用対効果、沿線自治体の取組等による着工の順位付けを検討するなどの「整備新幹線の整備に関する基本方針」及び「当面の整備新幹線の整備方針」が決定された。

4月：大村市に長崎県新幹線用地事務所を設置した。

8月：整備新幹線問題検討会議が開催され、「整備新幹線の未着工区間等の取扱いについて」が決定され、西九州ルートにおいては、

（1）肥前山口・武雄温泉の単線区間の取扱い

（2）軌間可変電車（フリーゲージトレイン）の取扱い（実用化）が課題とされ、詳細に検討していくとされた。

12月：整備新幹線問題検討会議が開催され、「整備新幹線の未着工区間等の取扱いについて」（平成22年8月決定）に掲げる各線区の課題について、さらに詳細な検討を進めることとされた。

2011年（平成23年）

10月：軌間可変技術評価委員会において、「軌間可変電車の実用化に向けた基本的な走行可能性に関する技術は確立していると判断される。」と評価された。

12月：整備新幹線問題検討会議が開催され、現在建設中の武雄温泉～諫早間と新たな区間である諫早～長崎間を一体的な事業（佐世保線肥前山口～武雄温泉間の複線化事業を含む。）として扱い、軌間可変電車方式（標準軌）により整備し、諫早～長崎間の着工から概ね10年後に完成・開業するとする着工方針が示された

2012年（平成24年）

4月：未着工区間の収支採算性と投資効果を改めて確認するために、整備新幹線小委員会の報告書がまとめられたことを受けて、整備新幹線問題検討会議が開催され、収支採算性と投資効果について確認がなされた。また、営業主体のJR九州の同意がなされた。

6月：国土交通省が鉄道・運輸機構に対し、武雄温泉～長崎間の工事計画（フル規格）を着工認可した。

認可後の動き

2012年（平成24年）

８月：長崎市で諫早～長崎間の起工式を開催。終了後、建設起工式典を開催した。

2013年（平成25年）

４月：鉄道・運輸機構が、長崎鉄道建設所を設置した。

2014年（平成26年）

２月：フリーゲージトレインに係る軌間可変技術評価委員会が開催され、「軌間可変台車の基本的な耐久性能の確保に目処がついた。」と評価された。

４月：熊本総合車両所において、第三次試験車両（４両編成）がマスコミに公開された。

４月：フリーゲージトレインの性能確認試験が開始された。

10月：フリーゲージトレインの３モード耐久走行試験が開始された。

12月：フリーゲージトレイン第三次試験車両のスラスト軸受のオイルシールに部分的な欠損、すべり軸受と車軸の接触部に微細な摩耗痕の発生が確認されたため、同車両の３モード耐久走行試験を一時休止。

2015年（平成27年）

１月：政府・与党整備新幹線検討委員会が開催され、「整備新幹線の取扱いについて（政府・与党申合せ）」が決定された。

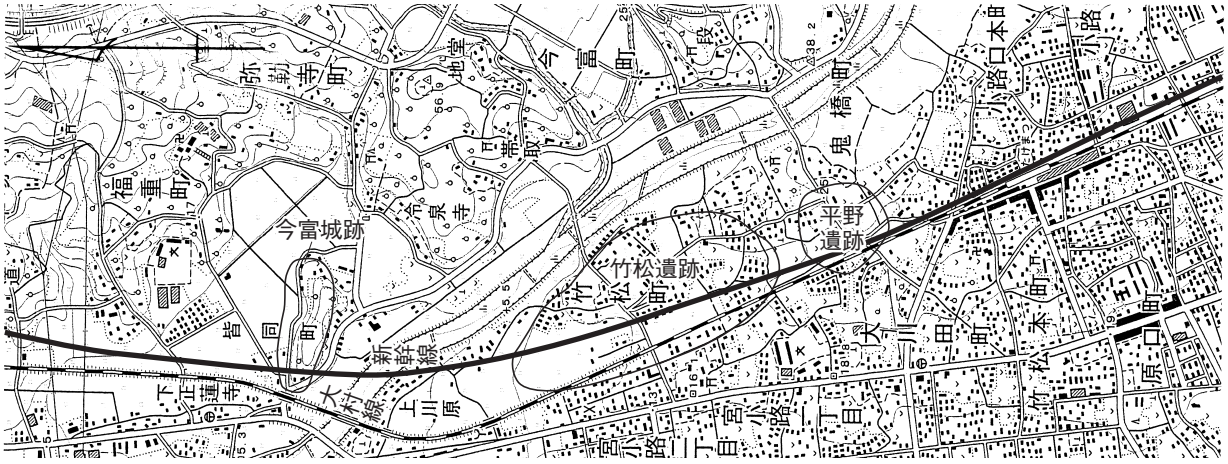
・西九州ルートにおいては、「フリーゲージトレインの技術開発を推進し、完成・開業時期を平成34年度から可能な限り前倒しする。」とされた。

・さらに、九州新幹線西九州ルートも対象に含めて、貸付料収入の前倒し活用等、必要な財源措置を講じるとされた。

８月：俵坂トンネル（嬉野市－長崎県東彼杵町、5.7km）が６年の工期を経て貫通。

今後の予定

2022年度中：武雄温泉－長崎間、在来線特急とのリレー方式で暫定開業（予定）。

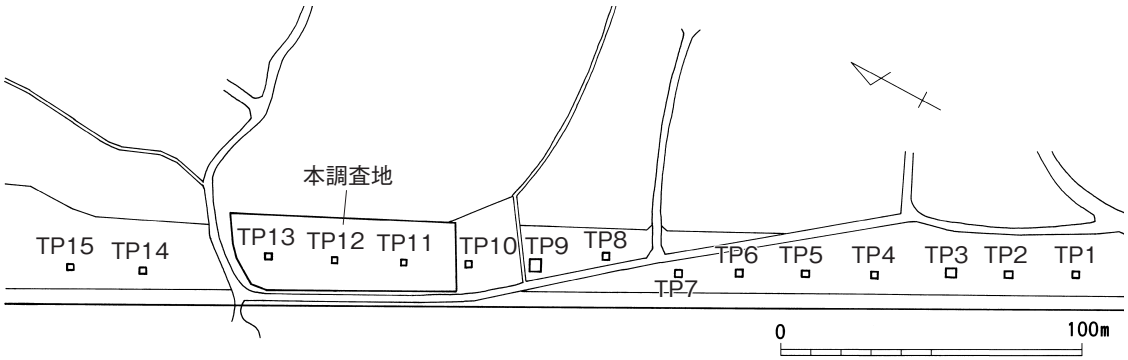


第２図　大村市北部の九州新幹線西九州ルート建設に係る遺跡分布図（１/25,000）

（２）範囲確認調査

①調査区

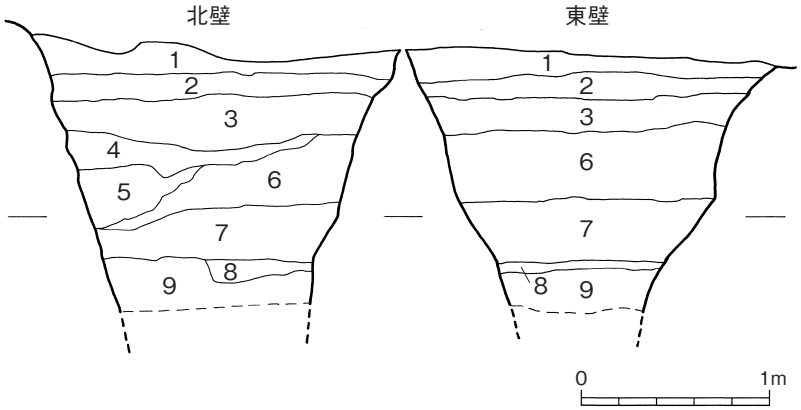
平野遺跡は、竹松遺跡の南側に位置し、東には弥生時代の川端遺跡、南に縄文時代の立小路遺跡が分布している。調査対象地は、幅20～25m、路線長380m で約7,600㎡の面積となる。当初の予定では２m×２m の試掘坑を25m 間隔で17箇所設定して行う予定だったが、遺構・遺物の出土状況等を勘案し、結果的には15箇所で調査を行った。その中の２箇所を重機で３m 程深掘したので、それぞれ試掘坑の大きさが４m×３m と4.3m×4.8m に広くなり総面積では68㎡の予定が84㎡に増加した。調査は平成24年10月２日から10月16日にかけて実施した。**(第３図)**



第３図　範囲確認調査試掘坑位置図（１/2,500）

②土層

平野遺跡の土層は一見安定しているようにみえる。しかし、各層位からの出土遺物を詳細に検討してみると、縄文時代晩期土器が出土した層の下層から中世期のものと思われる土師質土器が出土し、層位に於いて時代の新旧関係を確認できない状況にある。なんらかの自然営為的事象等を考慮せざるをえない。



第４図　TP12土層図（１/40）

旧地形が窪地と判断され、その上に比較的安定した土層の堆積が認められ遺物も多かった TP11～TP13の範囲の中から、TP12の土層を示すこととする。**(第４図)**

TP12の土層は以下のとおりである。

１層；10YR２/２黒褐色　耕作土

２層；10YR２/２－３/１黒褐色　粗砂多く５～20㎜礫まばらに含む

３層；10YR３/２－３/１黒褐色　粗砂～５㎜礫多く10～50㎜の礫まばらに含む

４層；10YR２/２－２/１黒－黒褐色　粗砂まばらに、10～20㎜の礫まれに含む

５層；10YR２／１－２／２黒－黒褐色　粗砂、10㍉の礫まれに含む
６層；10YR２／２－３／２黒褐色　細砂、２～20㍉の礫まばらに含む
７層；10YR３／１黒褐色　10～50㍉の礫多く含む
８層；10YR５／３にぶい黄褐色　粗砂10～20㍉の礫まれに含む９層との境に鉄分沈着
９層；10YR５／６黄褐色粗砂わずかに含む
※４層～７層で遺物が出土

写真１　TP12北壁

③遺構・遺物

遺構は確認できなかった。

遺物の出土もあまりみられなかった。TP１～４の範囲内で縄文時代晩期の土器及び同時期のものと思われる打製石斧も出土した。しかし、土層のところでも述べたようにTP２に於いて新旧が逆転する状況等も認められた。TP１～４等では近世陶磁器が混入する状況も確認できた。

TP10～13の範囲では、この４試掘坑を合わせて98点の弥生土器等の遺物が出土していて全体の68％を占めた。

④結果

TP１～４の範囲で縄文時代晩期の土器３点と打製石斧１点を確認したが、その下層から中世期の土師質土器が出土したことから、何らかの自然営力による逆転現象等が考えられ包蔵状態はよくないと判断した。

TP10～13は、旧地形が窪地と判断され、その上に比較的安定した土層の堆積が認められ遺物も多かった。包蔵状態は比較的良好であると考えられる。

2　調査組織

平野遺跡の発掘調査は長崎県教育庁が担当し、発掘調査業務を大成エンジニアリング株式会社に委託した。

調査組織および調査期間・面積は次のとおりである。

調査組織　新幹線文化財調査事務所　所長　副島　和明（平成25年度）
古門　雅高（平成26年度～）
課長　田尻　清秀（～平成27年度）
杉原　敦史（平成26年度～）
小島　克孝（平成28年度）
係長　村川　逸朗（～平成27年度）
主任主事　浜口　広史
範囲確認調査担当　係長　村川　逸朗
文化財保護主事　山梨　千晶
本調査担当　文化財保護主事　本田　秀樹
文化財調査員　生田　次男
小川　慶晴
大成エンジニアリング株式会社
現場代理人　渡辺　宏司
調査員　坂上　直嗣
大崎　美鈴

調査期間および調査面積

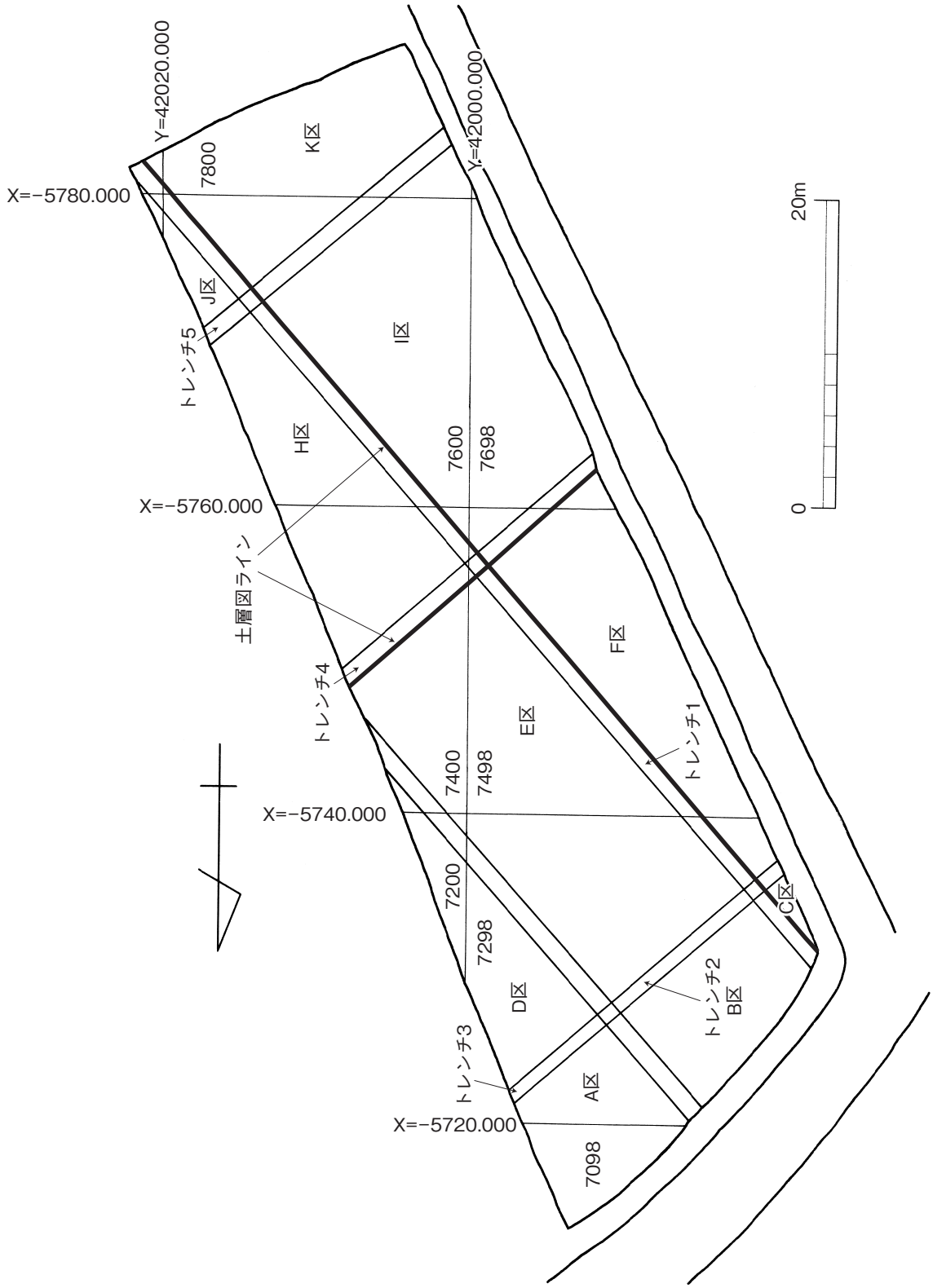
平成24年度　範囲確認調査　平成24年10月２日～10月16日　84㎡
平成25年度　本調査　平成25年６月26日～10月15日　1700㎡

報告書担当　文化財保護主事　浦田　和彦
文化財調査員　堀内　和宏
東郷　一子

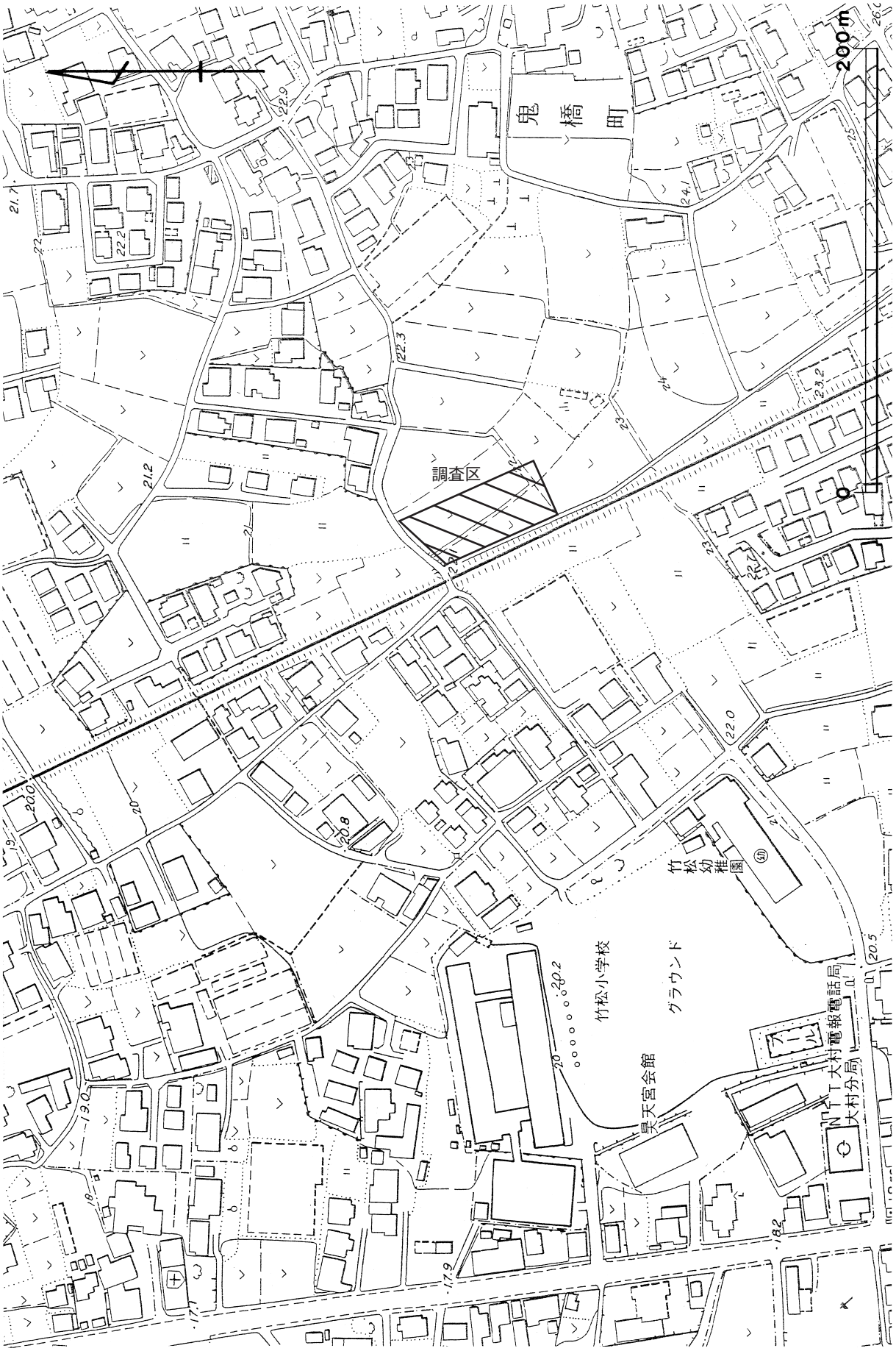
3　調査の方法

調査は、国土座標に則って20m四方のグリッドを設定し、併せて、地形に応じ第１～５のトレンチを設けて土層確認を行いながら実施した（**第５図**）。掘削は、表土部分の40cmを重機で、それより下の土層は全て人力で掘り下げた。最終的には郡川の堆積作用による砂礫層までを発掘調査の対象として扱った。

出土遺物は、遺構に伴なうもの及び原位置を保っていると判断されるものについては、出土状況を写真撮影し、個々に座標値を記録して取り上げた。それ以外のものはグリッド毎に各出土層位で一括して取り上げた。



第５図　グリッドおよびトレンチ配置図（１/400）



第６図　平野遺跡調査区周辺地形図（１/2,500）（大村市地形図Ⅰ列３番）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

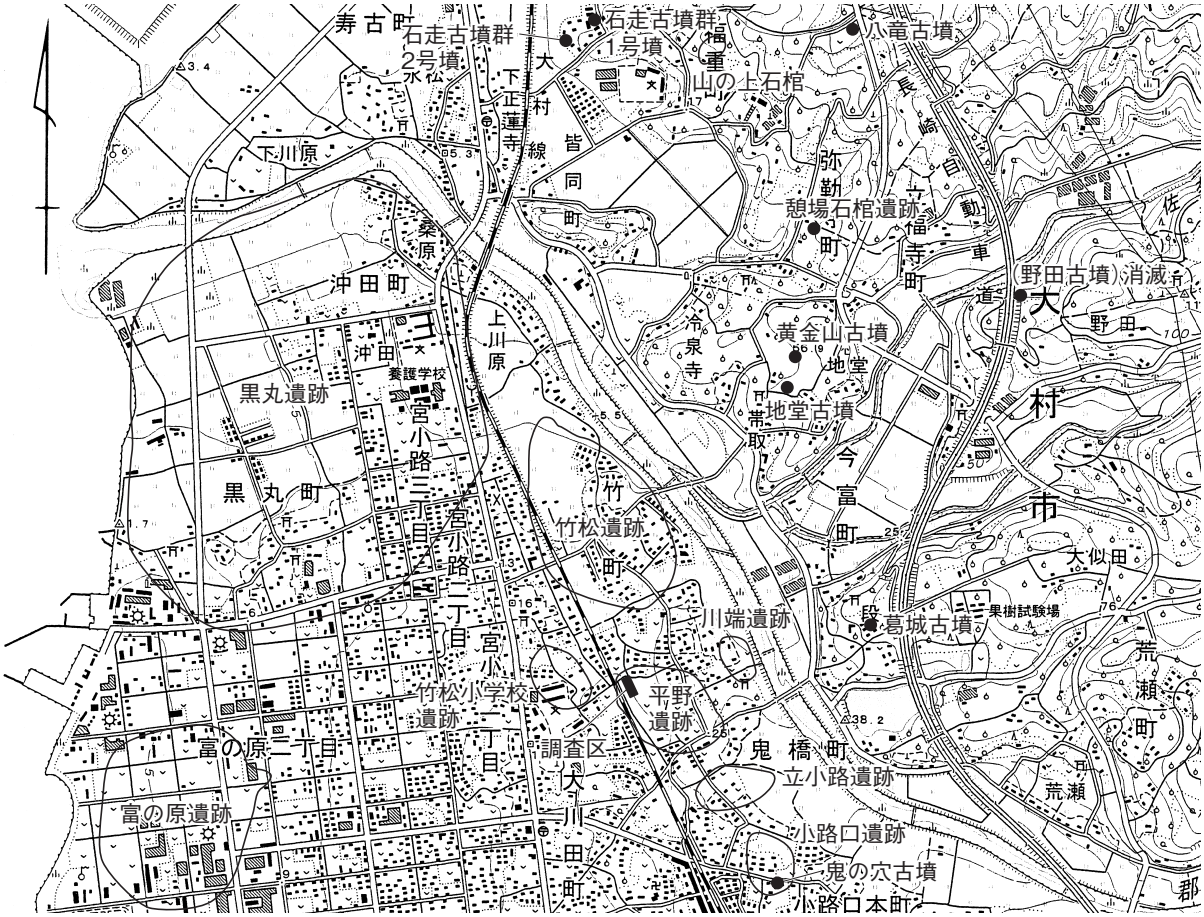
1　地理的環境

大村市は長崎県本土部のほぼ中央に位置し、市内には多良山系を源として大村湾に注ぐ市内最大の二級河川郡川が流れ、この郡川と大上戸川が運搬した土砂によって東西約2.5km、南北約６km の広がりを持つ県内最大の河成扇状地である大村扇状地が形成されている。大村扇状地は矢次橋付近から郡川河口に向けて広がる完新世の新規扇状地と郡川下流部の黒丸・沖田・寿古に発達した三角州からなる。本遺跡は、郡川西岸の微高地で標高22m 前後を測る場所に所在する。規模は、東西・南北約300m ほどの範囲である。現在は畑および宅地として利用されている。

2　歴史的環境

遺跡はこれまで古墳時代の遺物包含地として周知されている。周辺には、当遺跡の郡川の対岸東側の尾根の先端部に北から東にかけて石走古墳群、山の上石棺、八竜古墳、憩場石棺、野田古墳(消滅)、黄金山古墳、地堂古墳、葛城古墳とあり、南の平地には鬼の穴古墳がある。また、北には縄文時代から中世に至る包蔵地である黒丸遺跡・竹松遺跡、西には縄文時代の遺物包含地である竹松小学校遺跡、東には弥生時代の遺物包含地である川端遺跡、南には縄文時代の遺物包含地である立小路遺跡があり、古くから継続的な人々の営みが残されてきた場所である。

近年では新幹線用地買収を契機とする個人住宅建設に伴い、平成23年６月に大村市教育委員会により16㎡の発掘調査が実施され、黒色土中から土師質土器片や黒曜石砕片が出土している。



第７図　平野遺跡周辺地形および遺跡分布図（1/25,000）

Ⅲ　調査の概要

Ⅰ　基本層序

１層は黒褐色土の耕作土である。２層は褐灰色土の床土である。この１・２層は農客土と思われる。３層は１層より黒に近い黒褐色土で、大村扇状地にまばらに広がる黒色腐植土、黒ボク土で完新世以降の人々の活動（野焼きや山焼きなど）によってもたらされたと考えられている。４層は褐色土で縄文時代晩期の遺物包含層と考えられる。５層はいわゆる大村扇状地礫層で混礫明黄褐色砂質土である。遺物は包含されていない。**（第８・９図、写真２・３）**

参考文献

阪口　和則『新編　大村市史』第一巻　第一章　第四節　第八項　扇状地の黒土2013

写真２　トレンチ１東壁

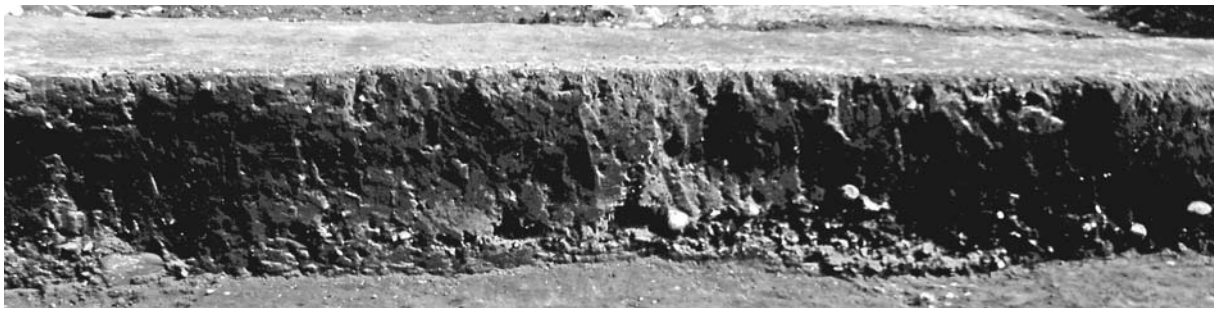


写真３　トレンチ４北壁

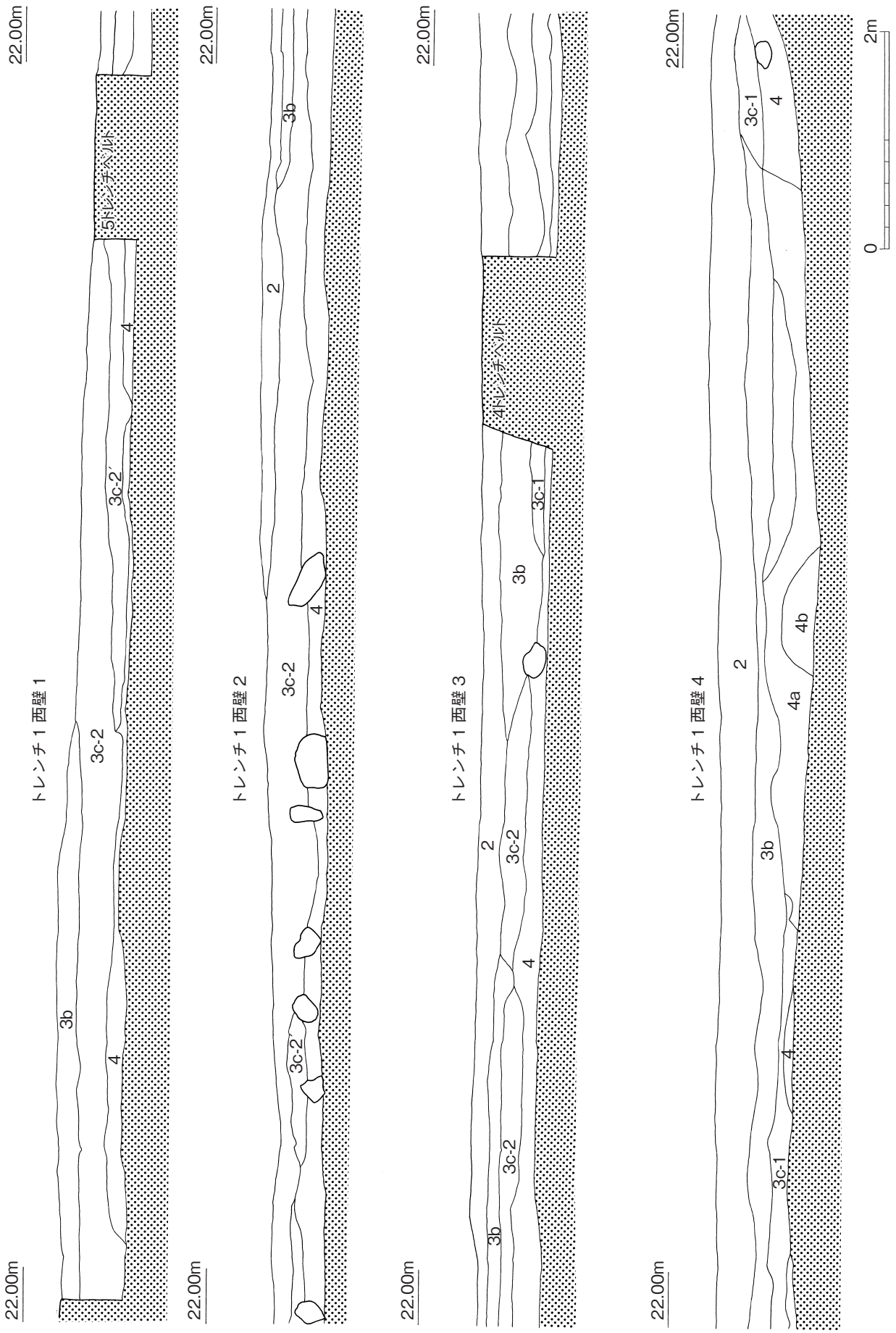
第１層　黒褐色土：耕作が行われている表面の土。

第２層　褐灰色土：調査区の東半分では礫を埋めた廃棄土坑が、西半分では電柱を補強する支線（ステー）のアンカー埋設坑が数箇所で確認された。撹乱が著しく及んでいる層である。主に近世～近現代の陶磁器類が出土する。

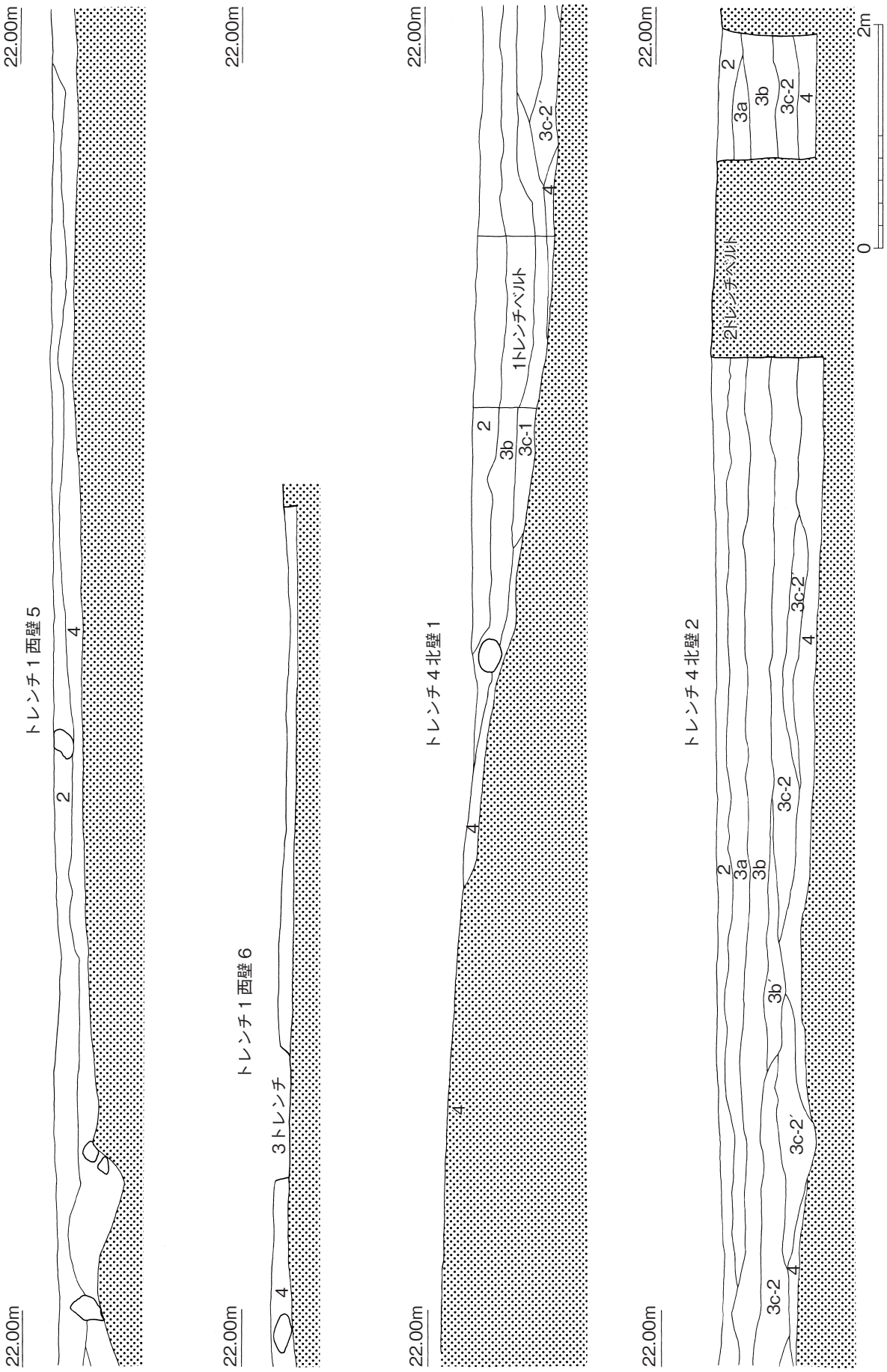
第３層　黒褐色土：第１層より色調は黒に近い。層の下位では、河川堆積や土石流によってもたらされた礫（人頭大～径60cm 超まで）が多数混在する。弥生時代から中世までの物が出土する二次堆積包含層。２層と４層の漸移層があり３a～３c 層に細分した。

第４層　褐色土：第３層から第５層にかけての漸移層で、場所によっては鉄分を含んだにぶい黄褐色土が堆積しているところもある。縄文晩期の遺物を包含する。

第５層　混礫明黄褐色砂質土：河川堆積によって形成された層で、粗砂と拳大～人頭大の礫で構成される。遺物の出土は無い。



第８図　トレンチ１西壁土層図１（1/50）

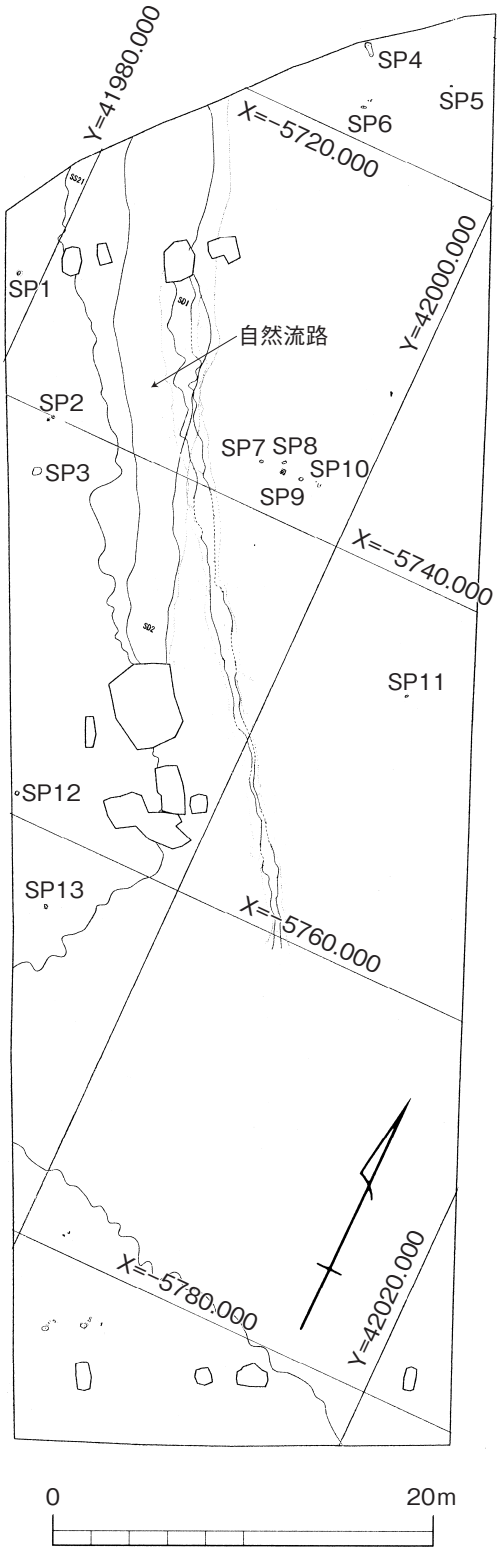


第９図　トレンチ１西壁土層図２・トレンチ４北壁土層図（1/50）

Ⅳ　遺構・遺物

遺構は、ピットらしきもの10数基が確認されたが、遺物を全く伴わず、形状も不整形で、明確な遺構とは断定できるものはなかった。4層から5層にかけ、地形の起伏に沿った自然流路が確認できた（**第10図**）。

遺物は縄文時代から近世初頭までの遺物が約5,000点出土した。そのうち、石器は全体の約5％にすぎず、94％は土器・陶磁器類であった。また、土器・陶磁器類の85％は原始古代までの土器で、中世以降は15％にすぎなかった。層位別では、2層と3層からの出土が約64％で、4層は全体の1％にも満たなかった。



第10図　遺構配置図（1/400）

1　2層の遺物

（1）土器

1は黒色磨研された縄文晩期の精製浅鉢の口縁部である。**2**は口縁部のみの出土で全体の器形を知りがたいが、やや内傾する口縁部が強く内湾することから、推定口径30 cm以上の弥生中期の複合口縁壺と思われる。**3**は古墳時代の土師器高杯で、内外面に赤色塗付が見られる。**4**は古代の土師器杯の底部で、草書体の「東」に近い字形の刻書を内面見込みに持つ。回転ヘラ切りで10世紀の器形かと思われる。文字の意味する所は図りがたいが、福岡市柏原遺跡M地点や熊本市陣山遺跡など北部九州の古代集落遺跡で「東」と書かれた刻書・墨書土器がまとまった数出土している。これらの遺跡では「寺」などの文字記載を持つ土器や仏教的遺物と共に、石帯、硯などの官衙的遺物や初期貿易陶磁との共伴が見られ、平安期の官衙周辺集落の一つの属性として在地の仏教信仰の様相を示していると考えられる。

5は高台付の須恵器杯で、体部が丸く高台が外反する。小田編年Ⅵ期、7世紀終わりに位置付けられる。**6**は瓦質土器の鉢の体部で、丹念なミガキを内外面に施す。**7**は瓦質のすり鉢で、胴部に7条単位のすり目を縦方向ないし強い右下がりにまばらに施す。**8**は中世の回転糸切りの土師器皿で、器径7.6 cm、器高1.5 cmとなり、13世紀末の山本信夫編年ⅩⅨ期の小皿bである。

9～13は中世の輸入青磁である。**9**・**10**は龍泉窯系の青磁碗の口縁部で、**9**は内面に劃花文を

施す。**10** は外面に鎬蓮弁文を施す。**11**・**12** は細線蓮弁文の青磁碗の口縁部で、釉がやや厚く貫入が多い。いずれも外面に点状の窯傷を持つ点で、やや粗製である。**11** は 15 世紀半ばに見られる。**12** の蓮弁文は線の間隔を狭めるものの簡略化が見られ、端部はやや内傾して直線状をなし、15 世紀末に位置付けられる（上田 1982 ）。**13** は無文直口碗で、さらに釉薬が 1 mm ほどと厚く、口縁部がわずかに肥厚し、続く外面にゆるい落ち込みを持つ。**14** は青白磁合子の口縁部で、蓋に接するＶ字状の口縁から内面は露胎で、内面側に欠損が見られる。**15** は朝鮮半島産の磁器皿の高台部で、胎土がやや粗であり、畳付けから高台内は無釉である。**16** は白磁鉢の口縁部で、口縁と体部上半のみ八角の稜がつく。器径、器高は復元できず、年代は下る可能性がある。**17** は花唐草文を有する明青花瓶の頸部及び胴部である。**18** は青磁大鉢の高台部である。釉薬は薄く高台内は露胎であり、見込みに陽刻を有するも、文様は不明である。**19** は滑石製石鍋の口縁部である。鍔付きだが内外面の損傷が激しい。

参考文献

上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会1982

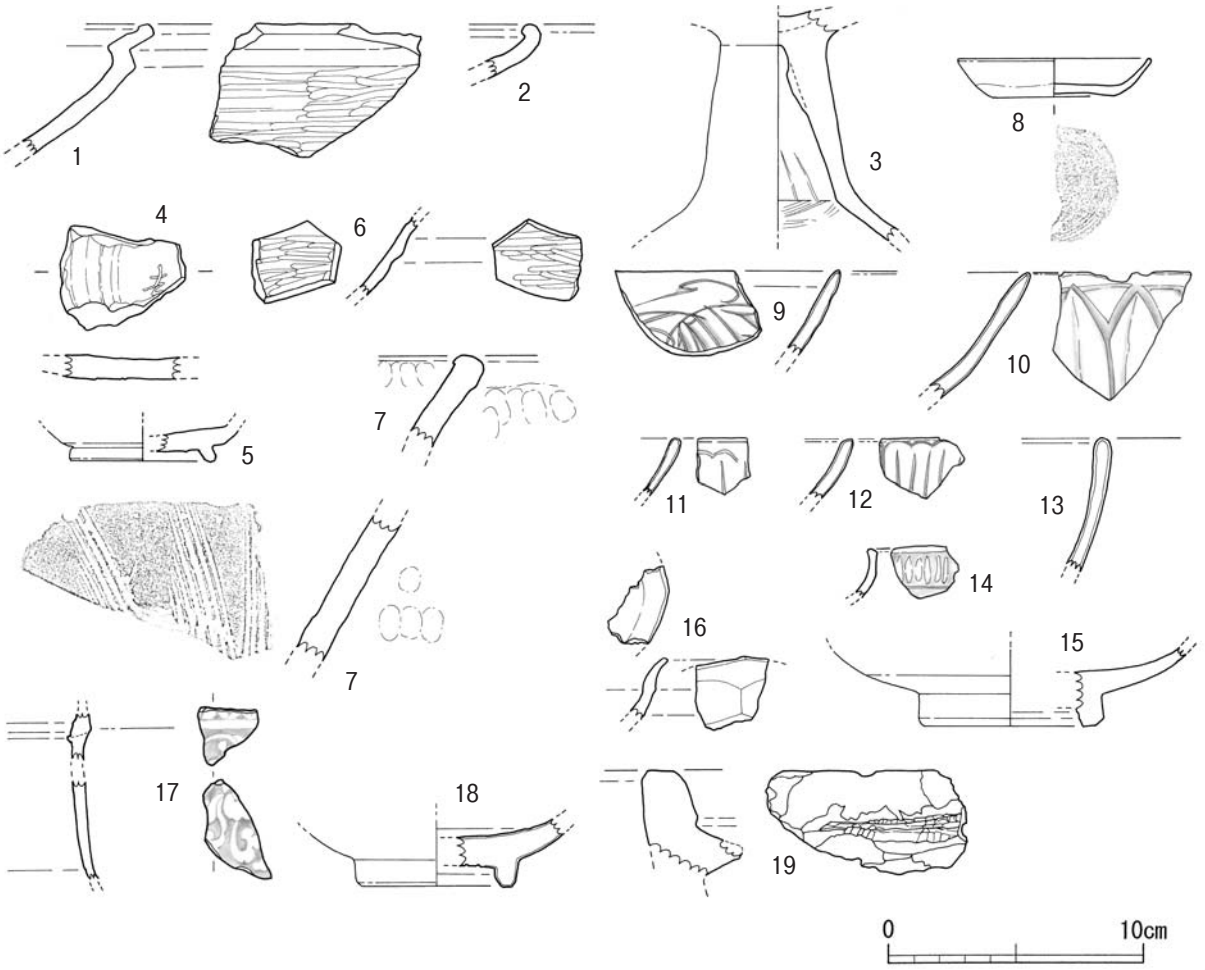
丸山伸治・川俣恵編『陣山遺跡』熊本県文化財調査報告第 155 集 1996

山崎純男編『柏原遺跡群Ⅵ―古墳・古代遺跡M遺跡の調査―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第191集1988

山本信夫「統計上の土器―歴史時代土器の編年研究によせて―」『九州上代文化論集』 1990

表１　２層出土土器観察表

図版番号	器種	部位	調査区	法量（cm）			調整		色調		焼成	胎土	備考
				口径	器高	器径	内面	外面	内面	外面			
1	浅鉢	口縁部	Ｉ区　7698	―	―	―	横ナデ→ヘラミガキ	横ナデ→ヘラミガキ	灰黄褐色	褐灰色	良好	良	黒色磨研
2	壺？	口縁部	Ｆ区　7498	約30	―	―	丁寧なナデ	ミガキ→丹塗り	明黄褐色	明赤褐色	良好	良	複合口縁壷か
3	土師器高杯	脚部	Ｈ区　7600	―	―	―	ケズリ→ナデ	ケズリ→ナデ	明赤褐色	明赤褐色	やや良	良	内外面共に赤色塗付か
4	土師器杯	底部	Ｆ区　7498	―	―	―	回転ナデ	回転ナデ	橙色	橙色	良好	―	底部内面に線刻「東」？
5	須恵器碗	高台部	Ｅ区　7298～7498	―	―	―	回転ナデ	回転ナデ	灰色	オリーブ黒色	良好	―	底径5.75cm　高台高0.46cm
6	瓦質土器鉢	体部	Ｅ区　7298～7499	―	―	―	回転ナデ→ミガキ	回転ナデ→ミガキ	灰白色	灰色～灰白色	やや良	良	
7	瓦質土器すり鉢	口縁～胴部	Ａ区7298	―	―	―	口縁部：指圧痕→横ナデ　胴部：七条単位のすり目	口縁部：ナデ　胴部：指圧痕→横ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	軟質	良	口縁部と胴部の二片　接合関係・位置不明
8	土師器小皿	口縁～底部	Ｈ区　7600	7.6	1.5	7.6	強いナデ	全体ナデ 底部:糸切り→ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良好	良	底径4.8cm　外面全体に化粧土が付着
9	青磁碗	口縁部	Ｈ区　7600	―	―	―	施釉／文様	施釉	灰色	灰色	―	―	龍泉窯系
10	青磁碗	口縁部	Ｄ区　7298～7200	―	―	―	施釉	施釉／鎬蓮弁文	暗オリーブ色	暗オリーブ色	―	―	龍泉窯系
11	青磁碗	口縁部	Ｄ区　7298	―	―	―	施釉	施釉／細線蓮弁文	オリーブ灰色	オリーブ灰色	貫入あり	―	
12	青磁碗	口縁部	Ｅ区　7298～7498	―	―	―	施釉	施釉／簡略化された細線蓮弁文	にぶい黄色	にぶい黄色	貫入あり	―	端部がやや内傾
13	青磁碗	口縁部	Ｉ区　7600	―	―	―	厚く施釉	厚く施釉	ひすい色	ひすい色	良好	精良　0.5～1.0mmの黒色斑点あり	口縁部がわずかに肥厚
14	青白磁合子	口縁部	Ｄ－Ｅ区間１トレンチ一括	―	―	―	口縁部：露胎 腰部から施釉	施釉	灰色／黄灰色	灰色	―	―	
15	磁器皿	高台部	Ｉ区　7600	―	―	―	施釉	施釉／露胎	灰色	灰色	―	やや粗	底径6.7cm 朝鮮陶磁
16	白磁鉢	口縁部	Ｄ区　7298	―	―	―	施釉	施釉	灰白色	灰白色	―	―	口縁が八角をなす
17	明青花瓶	頸部・胴部	Ｅ－Ｈ区間４トレンチ一括・Ｄ区7298	―	―	―	施釉	施釉／花唐草文	―	―	―	―	出土地が12～30m離れた２片が同一個体、接合せず
18	青磁大鉢	高台部	Ａ区　7298	―	―	―	施釉／陽刻？	施釉／露胎	明オリーブ灰色	明オリーブ灰色	やや粗 気泡あり	やや粗	底径6.2cm　高台高0.8cm
19	滑石製石鍋	口縁部	7400	―	―	―	―	―	―	―	―	―	鍔付き



第11図　２層出土土器実測図（１／３）

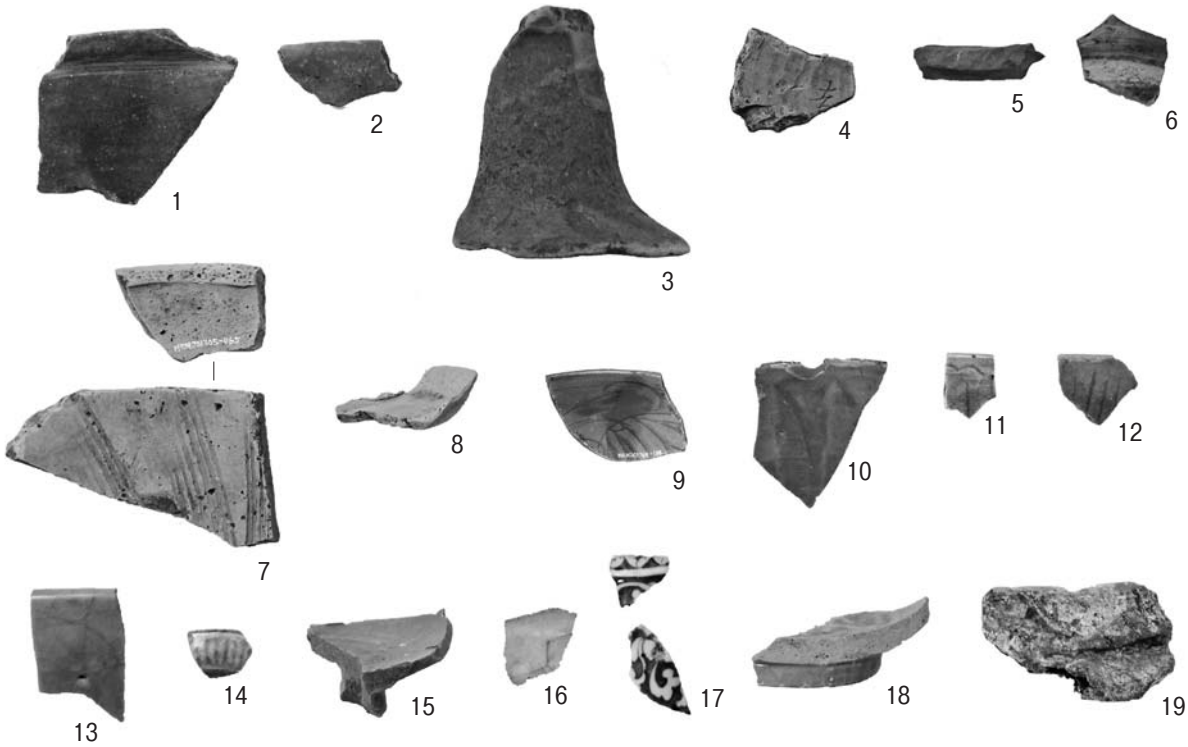


写真４　２層出土土器

2　3層の遺物

（1）土器

1～6は縄文晩期の鉢類である。**1**は底部に網代状の組織圧痕を持つ浅鉢で、中華鍋状を呈す。口縁部から底部外縁が残存し、胴部には横方向の条痕文を施す。縄文晩期の黒川式並行期の粗製土器である。復元口径は37.1cmを計る。南島原市（旧深江町）権現脇遺跡の形式分類では浅鉢M類に相当し、礫石原式から原山式にかけての時期に位置付けられる（本多・大坪2006）。**2**は押型文土器の胴部片である。**3**・**4**は棒状工具による刻目突帯を持つ胴部片であり、縄文・弥生移行期の様相を示す。黒丸遺跡の場合（平田2009）と同様に、洪水などによる遺物移動が想定されて一括性に乏しく、弥生式土器とのセット関係は把握しがたい。ローリングによる摩滅が激しいため調整技法は確認しがたいが、**4**には横方向の条痕文の痕跡がある。いずれも突帯付近でやや屈曲する器形で、原山式並行期（Ⅲａ期・中尾2013）ないしやや年代が下ると想定される。**5**・**6**は黒色磨研された晩期の精製浅鉢である。**5**は口縁部で、外面の口縁近くに浅い沈線を二条施す。**6**は肩部片で、水平に近い角度まで内湾した後に屈曲して口縁に向かって外反する。

7・**8**は口唇部の両面に突帯がついて端部に平坦面を形成するに至った段階の浅鉢で、弥生前期の板付Ⅱ式並行期（Ⅳ期・中尾2013）に位置付けられる。**9**～**11**は底部片で、いずれも磨耗が著しい。**9**は甕の底部で、外面に縦方向の細いハケ目調整を有する。**10**は平底甕の底部で、外面にハケ目、内面はナデと底部指押さえを施す。**11**は弥生後期の壺の底部である。

12～**16**は高杯である。**12**～**15**に脚柱部片を示す。**12**は直径4cm程度の中空の脚柱部が8cmほど縦に伸びて細長く、内面に右下がりの荒いケズリ、外面に右下がりのハケ目を施した後にナデる。裾部の三方向に直径8mmほどの穿孔を施す。**13**はわずかに杯部を残し、内面は約7mmほどのヘラ状工具でケズリ、外面は縦方向のハケ目をナデる。裾部に二ヶ所直径10mmほどの穿孔を施す。**14**は中実だが、焼成時に生じた空洞と割れが内面天井部にある。全体に摩滅が著しい内外面共に縦方向のヘラケズリの後にナデ調整を加え、裾部三方向に直径10mmほどの斜め穿孔を外側から入れる。**15**は脚柱部が2cm強と短く太めで、上端は杯部との結合部、下端は脚端部との接合部で割れている。外面は縦方向のハケ目調整を施すも、かなり摩滅している。内面の天井部には指圧による調整痕が残る。**16**は杯部から脚部を残す。

17は須恵器の杯蓋で、底径14cmほど、つまみの有無は不明である。端部のかえりが消失して嘴状を呈し、天井部と体部の関係から牛頸編年ⅦＡ期、８世紀前半に位置付けられる。焼成時の歪みがある。**18**は須恵器杯で、底径9.1cmを測り、口縁部を欠く。四角形の高台は太く端部により、腰部はやや丸みを帯びて立ち上がる。器形の要素からは年代はやや下る可能性があるが、器径に注目すると牛頸編年ⅦＡ期の古相に属し、８世紀半ばに位置付けられる（舟山2008）。肥後地域における土器の年代観（網田1994）とも符合する。

19～**24**は中世に属する。**19**は平底の底部を糸切りする中世の土師質土器の底部片で、復元底径7.8cmを測り、全体の器形は不明である。**20**は瓦器碗の口縁部で、内面にヘラミガキ調整を加え、外面端部が焼成により黒変する。**21**は糸切り土師器碗の底部であり器形は**19**に似るが、復元底径が9.4cmとやや大きい。**22**は中世の土釜の取手部分であり、取手の穿孔部に鉄分の付着が見られる。**23**は中世貿易陶磁の青磁碗の高台部、**24**は白磁皿の底部である。

参考文献

網田龍生「奈良時代　肥後の土器」『先史学・考古学論究』龍田考古会・1994

中尾篤志「縄文時代」（原始編第二章）『新編大村市史』第１巻　2013

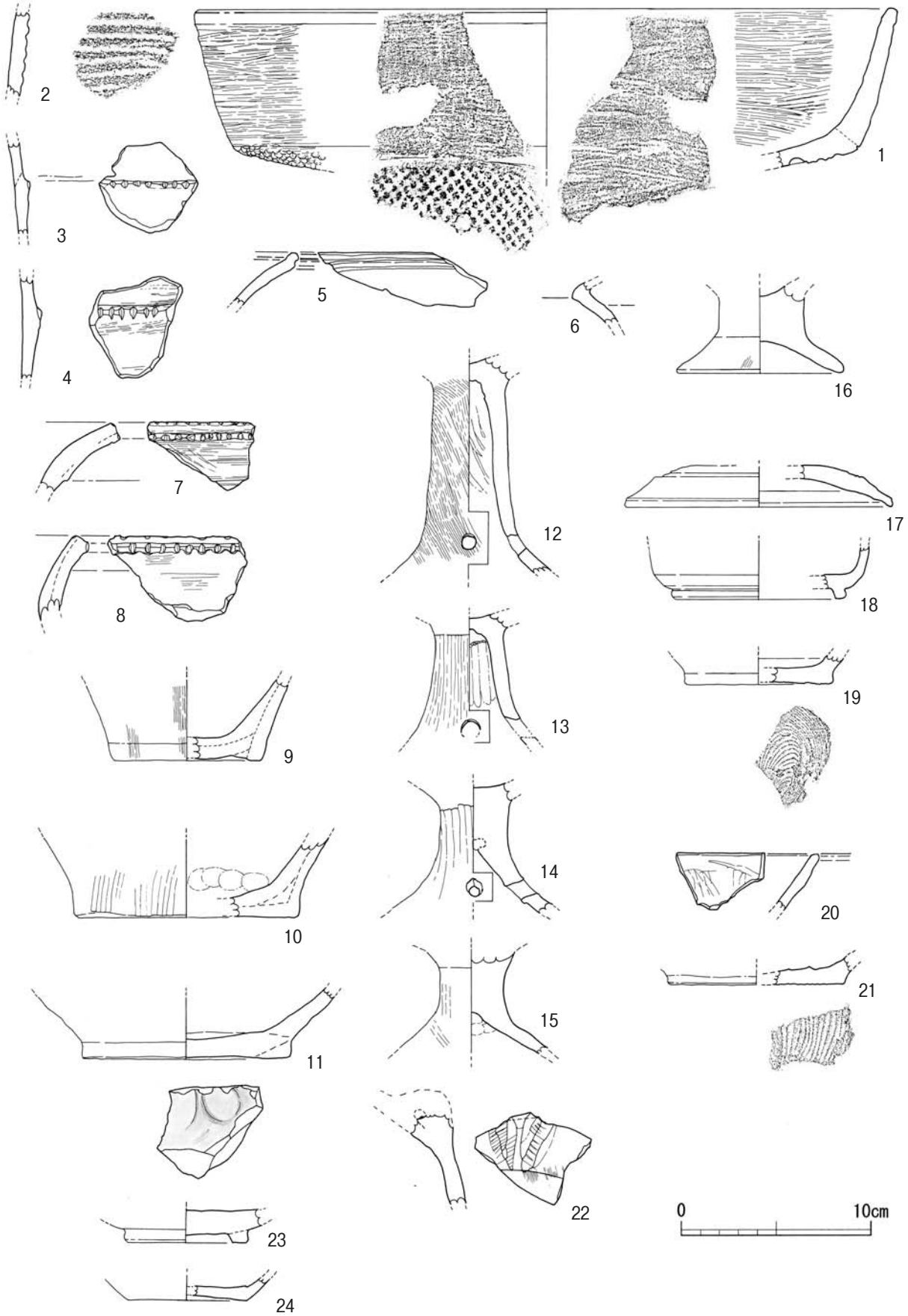
平田賢明『黒丸遺跡Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第201集2009

本多和典・大坪芳典他『権現脇遺跡』深江町文化財調査報告書第２集2006

町田利幸・宮﨑貴夫編『今福遺跡Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第84集1986

表２　３層出土土器観察表

図版番号	器種	部位	出土地区	法量（cm）			調整		色調		焼成	胎土	備考
				口径	器高	器径	内面	外面	内面	外面			
1	浅鉢	頸部	Ｅ区　7400	37.1	—	—	条痕文	条痕文／組織圧痕	灰～にぶい黄褐色	灰～明黄褐色	やや良	やや粗　円形白色粒子多し	
2	深鉢	胴部	Ａ区7028～7298	—	—	—	ナデ	押形文	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	やや粗	角閃石・雲母・白色粒子	ローリング
3	深鉢	胴部	Ｅ区　7400～7498	—	—	—	ヘラケズリ→ナデ	ヘラケズリ→ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	やや良	長石・雲母	刻目突帯　風化摩滅激しい
4	深鉢	胴部	Ｅ区　7498	—	—	—	ナデ	条痕文	にぶい褐色	にぶい褐色	やや良	長石・雲母	刻目突帯　風化摩滅激しい
5	浅鉢	口縁部	Ｆ区　7298	—	—	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒色	にぶい褐色	良好	精良	黒色磨研土器
6	浅鉢	肩部	Ｂ区　7298	—	—	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	暗灰黄色	黄灰色	良好	精良	黒色磨研土器
7	甕	口縁部	Ｈ区　7400	—	—	—	ヘラケズリ→ナデ	刷毛目→ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	やや良	長石・角閃石・雲母	口唇部に２条の刻み目　端部を指ナデ　摩滅
8	甕	口縁部	Ｅ区　7498	—	—	—	ナデ？	刷毛目？	明赤褐色	暗灰黄色	良	長石・雲母	口唇部に２条の刻み目　摩滅
9	甕	底部	Ｅ区　7498	—	—	—	ナデ	縦方向刷毛目	灰黄色	にぶい橙色～橙色	やや良	精良　わずかに長石	底径7.7cm　摩滅
10	甕	底部	Ｊ区　7600～7602	—	—	—	ナデ／指押さえ	刷毛目→横方向ナデ	橙色	橙色	やや不良	やや粗　長石、角閃石	底径7.7cm　摩滅
11	壺	底部	Ｅ区　7498	—	—	—	ナデ？	ナデ？	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色～橙色	やや良	長石・雲母	底径11.0cm　摩滅
12	高杯	脚柱部	7400 4トレンチ	—	(11.2)	—	ケズリ→ナデ／裾部に刷毛目	右下がり斜め刷毛目→ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	良好	精良　わずかに白色粒子	裾部３方向に穿孔
13	高杯	脚柱部	Ｊ区　7600	—	(6.6)	—	ヘラ状工具７mm幅調整／ケズリ→ナデ	縦方向刷毛目→ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	やや良	精良	裾部２ヶ所に穿孔摩滅激しい
14	高杯	脚柱部	Ｆ区　7498	—	(7.0)	—	ケズリ→ナデ	縦方向ケズリ→ナデ	橙色	橙色	良	精良	裾部３方向に穿孔　摩滅
15	高杯	脚柱部	３トレンチ	—	—	—	ナデ／指圧痕	縦方向刷毛目→ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	良好	精良	中実　全体に磨耗　杯部との結合部で剥離
16	高杯	杯～脚部	１トレンチ	8.8	—	—	ケズリ→ナデ	ハケ目→ナデ	橙色	橙色	やや良	精良	磨耗著しい
17	須恵器杯蓋	口縁～天井部	１トレンチ	14	(2.2)	—	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	灰色	良好	—	焼成時の歪みあり　残存率25%
18	須恵器碗	高台部	Ｅ区　7498	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ→自然釉	黄灰色	灰色	良好	−	底径9.1cm
19	土師器杯？	底部	Ｅ区　7498	—	—	—	回転ナデ	ナデ／糸切り	明赤褐色	明赤褐色	良好	精良	底径7.8cm
20	瓦器	口縁部	Ｈ区　7600	—	—	—	ヘラミガキ	回転ナデ	黄灰色	黄灰色	—	—	外面の端部近くが黒変
21	土師器碗	底部	Ｊ区　7600	—	—	—	ナデ	ナデ／糸切り	黄褐色	黒色	良好	精良	
22	土釜	取っ手	Ｈ区　7600	—	—	—	ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	黄灰色	黄灰色	良好	精良	鉄さびが穿孔部に付着
23	青磁碗	高台部	Ｆ区　7498	—	—	—	施釉	施釉／露胎	オリーブ黄色	オリーブ黄色	—	—	底径6.4cm 貫入あり
24	白磁皿	底部	Ｈ区　7600	—	—	—	施釉	施釉	灰白色	灰白色	—	—	底径6.2cm

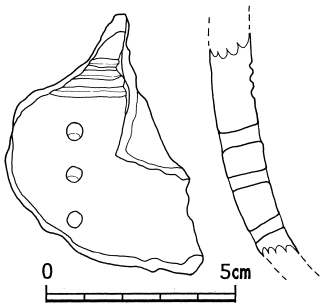


第12図　3層出土土器実測図（1／3）

写真 5　3 層出土土器

（2）器台について

1は弥生時代後期から終末にかけての時期の器台の脚部で、縦方向に並んだ直径5㎜弱の三連の円形透かしの穿孔を持つ。穿孔は外面から内側に向かってやや下向きに施され、穿孔部の下方には横方向の深いヘラ描き沈線文を施す。右上の傾いた方形のえぐりは後の欠損と見られる。器厚は文様部で計って1cm程度であり、穿孔の続く方向に向かって薄くなる。類例から見て、沈線文を器台の中央に配置し、下方の裾部に向かって器厚が薄くなるものと想定して作図した。破片の残存状況から全体の器径・器高は復元しがたい。方形透かしの存在そのものは残存部分からは定かではないが、小ぶりな穿孔とヘラ描き文の並存する器台の事例は他遺跡でも確認されておらず、方形透かしの存在を仮定した方が妥当と考えられる



第13図　3層出土器台実測図（1／2）　写真6　3層出土器台

表3　3層出土器台観察表

図版番号	器種	部位	出土地区	法量（cm）			調整		色調		焼成	胎土	備考
				口径	器高	器径	内面	外面	内面	外面			
1	器台	脚部	Ⅰ区　7498 7898　7600	—	—	—	ヘラケズリ →ナデ	ナデ／刺突文 ／並行沈線	にぶい褐色	にぶい褐色	良	長石・雲母	3ヶ所に刺突による穿孔あり　摩滅

器台の中でも、縦方向に並ぶ小ぶりの円形穿孔と中央部の横方向のヘラ描き沈線文が並存する型式そのものの類例は少ない。編年については後述するが、後期の器台が北部九州で出土した事例を見れば、中心部の文様に突帯、櫛描き、ヘラ描きがあり、横方向の沈線に加えて斜線文を追加する例も多い。本資料の歴史的位置付けについて、方形透かしの入ったいわゆる「肥前型器台」の研究史、型式編年の中で系譜的に位置付けることが可能であると考える。関連する出土例を**表4**に掲げた。

肥前型器台は九州新幹線建設工事に係る竹松遺跡の調査区（2012・13年度）の中で、弥生後期から終末期に位置付けられる墓域内の2号祭祀遺構から、器台片が多く出土し、注目を集めることとなった。大きめの方形透かしを持つ代表的な1事例**表4**（5）のみ発表されている。復元、整理作業が進行中で、報告書は今後発行予定である。墓域は箱式石棺墓21基を含む4つの標石を持ち、器台出土地から10m弱離れた1号祭祀遺構からは焼けた人骨を含む土坑も見つかり、当時の特殊な祭祀のあり方が明らかとなっている。歴史的環境の章で先述のように、竹松遺跡の遺跡域は平野遺跡の北側に広く接し、一体的な生活空間として把握されると思われる。

有明海周辺で出土する方形透かしをもつ薄手の弥生後期の器台については、1960年代半ばの長崎市深堀遺跡の発掘調査の報告において、小田富士雄が最初に注目したものである（小田富士雄1967・2～4）。深堀遺跡のこの調査では、少なくとも弥生後期については良好な包含層による一括資料は得られなかった（注1）が、型式論的に編年が行われ、器台は後期に位置付けられた。九州内にその系譜を求めるよりは西部瀬戸内の土器の影響が指摘された（小田1967）。この編年と系譜の指摘には報告当時の近隣地域の調査事例の絶対的な不足によって、理論的仮定が多分に含まれるものだったが、以下で述べるように小田の想定の妥当性はますます追証されつつある。

1977～81年に緊急発掘された南島原市（旧南有馬町）今福遺跡の調査報告の中で、宮﨑貴夫は島

原半島の弥生土器全般の編年を行い、後期の器台についても型式論に基づいて編年案を提示した（宮崎貴夫1986）。宮崎の編年とほぼ同時の発表となったが、佐賀県武雄市の六角川周辺の遺跡調査に際してみやこ遺跡・茂手遺跡から方形透し付き器台が出土したことから、原田保則が佐賀・長崎県内で方形透し付き器台の事例集成を行い、台付甕の分布域と重なる有明海沿岸地域の弥生後期文化圏の存在を提起した（原田保則1986）。武雄市域は有明海沿岸からやや遠いように思われるが、中世には有明海に面した杵島郡地域と共に、六角川を遡る形で蓮華王院領長島荘として一括把握されて、郡司層の伝統的支配を基盤として、有明海を舞台とした平氏政権の交易活動の拠点として開発されたことが指摘される（服部英雄1979）。有明海から六角川の流域にわたって、杵島岳（最高点370m)をランドマークとした中世前期の地理的まとまりは、古代統一国家をはさんで（注２）弥生時代の地域連帯のあり方にも相通ずるものと考えられる。

九州大学が中心となって1967年に行われた島原市景華園遺跡の発掘調査の成果を整理する中で、小田富士雄は方形透かし付きの弥生後期の器台について改めて「肥前型器台」の名称を与え、上田龍児がその型式編年（**第16図**）、地理的系譜、使用目的を整理した。肥前型器台の命名のみならず、この報告は現在の研究の基準となっている（小田富士雄編2004）。

上田は、まず肥前型器台の系譜については、北九州に小型器台は弥生中期から存在するが、後期の器台との間に明確な系譜関係は指摘しがたいと見た。次いで、先の宮崎貴夫の編年案を受けて今福遺跡Ａ地区土器溜り出土の資料６を後期前葉に位置付けられる在地の系譜の起源としつつ、豊前地域（「東北部九州地域」と表現）を介して、西部瀬戸内型の大型器台（谷若倫郎1996）の影響を受けて後期後半に成立する、次いで庄内式土器を基準とする弥生終末期に盛行し、佐賀県久米遺跡の古墳時代初頭の資料をもって終焉する、と考えられるとした。

器台の所有形態並びに用途については、面的な発掘が行われた集落遺跡の佐賀市琵琶原遺跡、佐賀市（旧大和町）東山田一本杉遺跡、墳墓遺跡の北方町（現武雄市）東宮裾遺跡（未報告)、武雄市みやこ遺跡（18～20）の出土状況を参照し、集落では唯一の有力者の住宅内、墳墓では「副葬品をもつ集団に対する祭祀」に用いられたとされた。

編年の基準について、上田は口縁部形態と胴部文様に注目した。当初は丸みないし方形の口縁部（Ⅰ類）が胴部の突帯文と組合い、ヘラ描き沈線文、櫛描き文と組むようになる。次いで口縁が上方に肥厚（Ⅱ類）した場合は櫛描き文と組み、最終段階で二重口縁（Ⅲ類）と無文の組み合わせとなる（上田2004）。

宮崎はその後の再編年作業に当たって、上田説を基準としつつ近年の島原半島から大村湾内、佐世保市域に至る長崎県内の出土例を集成し、新たな編年図を提示した（宮崎2014・**第17図**参照)。上田説との最大の差異は、櫛描き文とヘラ描き文沈線文が併出する段階（Ⅲ期）よりはヘラ描き文と区画文（Ⅳ期）のみの段階が後出し、無文段階（Ⅴ期）に続くものと見た点にあろう。上田の指摘した杯部の口縁の変化については、県内出土の古墳時代初頭の器台の出土例の中に良好な二重口縁（Ⅲ）の資料を欠くことから、Ⅱ期とⅢ期の時期区分にのみ利用した。即ち、口縁部Ⅰ類がⅡ期（弥生後期後葉)、Ⅱ類がⅢ期（弥生終末期）に相当する。櫛描き文などの多様な胴部文様はⅢ期の一時期にのみ該当する（注３）と想定した。

さて平野遺跡の当該資料の年代を考えると、近隣地域から類似するものは４例出土している。

まず今福遺跡Ｂ地区３号溝Ⅱ層の資料**9**が挙げられる。穿孔の大きさは**1**より**9**が大きいものの、胴部中央のヘラ描き沈線文を併せ持つ意匠が**1**に最も類似している。宮﨑の編年ではⅢ期に位置付けられる。今福遺跡の遺構の層位論からは、３号溝Ⅰ層出土**9**とⅡ層の**8**の段階差しか導かれず、型式論による編年が混じることになる。Ⅲ期の**9**にはⅡ期の大型方形透かし（竹松遺跡**5**）は消え、３連の円形穿孔は平面配置で180度の対向位置にあり、４方向の上下に組む方形透かしが円形穿孔列の左右に２方向ずつ60度の間隔で入る。前後の方向性が意識されている。

今福遺跡Ｂ地区**9**に次いで**1**に類似するものは、武雄市みやこ遺跡Ⅲ区SK324出土資料**18**である（原田編1986・注４）。出土地点は先述のように六角川の蛇行部分の内側斜面に位置する。水辺の祭祀との関係が想定される。透かしの構成は今福の上述遺物にきわめて類似し、スリット状の方形透かしと３連の円形穿孔を併せ持つが、胴部中央の文様は貼り付け突帯文であり、平野遺跡の当該資料とは年代差があるものと思われる。上田龍児はみやこ遺跡の資料を後期後半新段階に位置付ける（上田2004）。宮﨑編年では、Ⅱ期の中で突帯文を持つ前半の段階に相当することとなり、今福遺跡３号溝Ⅱ層出土の**8**が時期的に対応することとなる。みやこ遺跡に隣接する茂手遺跡の出土品を含め、武雄市内出土の器台は底径35cmにも上る大型製品を含み、胴部文様帯の位置も上下に変化が見られる。内外面調整も上下の違いを意識したものが見られ、佐賀平野での器台の展開の起点としての性格を持つ（石橋2014a）。上田が肥前型器台の用途を論じたことを想起すれば、水辺の集落祭祀の場で、参加者が１方向から器台を見る際の方向性を意識した構成と言える。

さらに地理的に離れるが、菊池川中流域の熊本県菊池市うてな遺跡でも、円形穿孔と方形透かしを併せ持つ肥前型器台が出土している（西住欣一郎1992）。出土地点は弥生集落の環濠と思われる10号溝３・４層で、共伴する尖頭状丸底甕の年代観により、いずれの層も西新式新相段階に属するものとされている（檀2014）。３層出土品**24**はスリット状の方形透かしと３本の蛇行する櫛描き文を持つ個体が３個体あるが、作りにやや稚拙さが残る。４層出土品**25**は実測図に不詳の点（注５）が多いが、胴部中央の文様は８本の沈線とされている。４層出土品は宮﨑編年のⅢ期に概ね相当する位置づけが行われていることとなるが、今福Ｂ地区出土の**9**との前後関係は定めがたい。うてな遺跡出土の資料がいずれも器厚が厚い点について、檀は菊池川下流域など周辺地域の出土例が揃っていないことを以って意義付けを保留しているが、在地的な模倣品の可能性もあろう。厳密な前後関係は定めがたいが、櫛描き文と円形穿孔、方形透かしの並存の例となり、櫛書き文とヘラ描き文の相違はあるものの、胴部中央の文様と透かしの組み合い関係について、類例を示すこととなる。これまでの類例と同様、３連の円形穿孔は対向位置にあり、４方向の方形透かしが円形穿孔列の左右に２方向ずつ60度の間隔で入る。

加えて筑後地域にやや地域的な変容を遂げた類例が一例のみ存する。方形透かしを持つ肥前型器台の分布範囲は城原川に留まり、北部九州型（中期須玖式土器の甕棺葬と後期複合口縁壷の文化圏）の筑後平野の深くには入らないことが指摘されている（石橋2014a）が、数少ない例外が筑前町宮ノ前遺跡Ａの出土品である。北部九州型の円形穿孔と共に、上下分割のない縦長の方形透かしを持つ例である。方形透かしと円形穿孔が並存する点で平野遺跡出土の１や今福遺跡出土の**9**の類例たりうるものの、文様帯を持たない点で異なった様相を示す。部分的に肥前型器台の影響を受けた事例と言えよう。その中間的な形態として、報告書では写真のみの紹介だが、上で紹介した菊池市うてな遺跡10

号溝３層から、胴部文様帯を持たず、上下通しの方形透かしのみを４方向に持つ形態の個体が出土していることも注目される。

以上論じたように平野遺跡出土の器台**1**は円形穿孔とへら描き沈線文を持つ点において、有明海周辺地域に広く分布する肥前型器台の一類型として把握されることが明らかとなった。

表４　周辺地域出土器台一覧表

・編年に際しては県内出土例は宮崎貴夫の見解により、県外については特記なき限り報告書の執筆者の年代観により、他の器種の状況を参照して宮崎編年との並行関係を当てはめた
・特記（宮ノ本遺跡Ａなど）なき限り、方形透かしは胴部中央の文様帯をはさんで上下の組構成を指す
・本表は近隣県すべての器台の出土遺跡を網羅したものでも、出土遺跡内出土の器台の全事例を集成したものではなく、本文の論述に関係する事例のみに留めた。事例集成に関しては、『肥前型器台について』肥後考古学会・長崎県考古学会合同大会資料集2014を参照。

図番号	遺跡名	所在地	出土遺構・層位	法量（cm）				口縁部形態	胴部文様				透かし構成	編年	典拠	備考
				口径	器高	胴部径	器厚		突帯文	櫛描き文	へラ描き文	その他				
1	平野遺跡	大村市竹松町	Ⅰ区３層	—	—	—		不明			○		３連円形穿孔	Ⅲ期	本報告	
2	深堀遺跡	長崎市深堀町	Ｂ区０層	—	—	(9.0)	1.1	不明			○		方形	Ⅲ期	小田富士雄1967	
3				17.2	—	—	1	不明			○		?			裾部のみ残存
4			Ｄ区２層	—	—	9.0	1.0	不明		○			方形	Ⅲ期前半		
5	竹松遺跡	大村市竹松町	祭祀遺構２号	28.0	25.4	13.4	1.1	B			○		方形５方向	Ⅱ期後半	田島・川畑2014	報告書は未発行
6	今福遺跡	南島原市北有馬町	Ａ地区土器溜まり	16.6	(19.2)	10.8	2.4	A?				無文	楕円形穿孔	Ⅰ期	町田・宮崎1984	
7			Ａ地区溝	—	—	7.0	0.7	不明			○		文様帯下に円３連	Ⅲ期		横方向沈線に重ねて斜線へラ描き
8			Ｂ地区３号溝Ⅱ層	—	—	16.6	0.6	不明	○				不明	Ⅱ期前半	町田・宮崎1985	器厚が薄いため透かしなしか
9			Ｂ地区３号溝Ⅰ層	29.6	25.4	13.8	1.0	B			○		方形４方向・円形２方向	Ⅲ期		円形透かしは対向位置180度の関係にあり、垂直方向よりやや傾く
10			Ｃ地区竪穴住居址	—	—	13.6	0.9	不明			○		方形（個数不明）	Ⅳ期	町田・宮崎1986	他に斜線文、櫛描き文の器台片出土。やや年代は上がるか
11	門前遺跡	佐世保市愛宕町・中里町	２号集石遺構	28.2	(26？)	11.6	1.3	A			○		方形４方向	Ⅱ期後半	松尾2006	
12				—	—	12.2	1.2	不明			○					文様帯がやや上部に寄る
13			弥生後期河川跡	—	—	—	2.0	不明			○	「×」へラ描き	不明	Ⅲ期前半	江上2006	他にへら描き文の破片２点出土
14	五反田遺跡	東彼杵郡川棚町上組郷	堤防下Ⅲ層（赤褐色砂質土包含層）	—	—	12.4	1.2	不明			○		４方向方形	Ⅲ期	正林・宮崎1981	沈線浅い。ローリングによるものか不明
15	龍王遺跡	雲仙市国見町土黒今出	13・14区 SB５	—	—	12.0	1.6	不明			○		４方向方形	Ⅲ期前半	辻田・小野2008	SB は竪穴建物
16			13区　SB６	22.6	21.2	9.8	1.2	B			○			Ⅲ期		３条ごとに沈線文が組み、いずれも波状に屈曲
17			14区　SB２	—	—	—	0.8	不明						Ⅳ期		文様不明
18	みやこ遺跡	武雄市橘町大字大日字郷の木・潮見	Ⅲ区　SK324	28.4	25.6	14.7	0.9	A	○				４方向方形・円形２方向	Ⅱ期前半	原田1986	円形透かしは対向位置180度の関係にあり、前後を意識した構成
19				35.5	28.0	14.0	0.8	B	○					Ⅱ期？		突帯文は上下２本を離れて配置
20			SK404	30.5	24.0前後	13.8	0.9	B		○		○		Ⅲ期前半		斜線を櫛書文に重ねて格子状文様に近づける
21	茂手遺跡	武雄市橘町大字片白字茂手	Ⅴ区中央 SK509	28.8	21.2	14.3	1.0	A	○				２方向方形	Ⅱ期前半	原田1986	胴部中央より下に最狭部の文様帯の位置が下る
22			SK402	33.8	26.5	13.8	0.9	A			○			Ⅱ期後半		文様帯がやや下方に位置
23			SK414	28.5	25.0	11.2	0.9	A			○					沈線文の間に綾杉文を描くとするが、実測図になし
24	うてな遺跡	熊本県菊池市七城町字台	10号Ｂ溝３層	20.2	18.4	9.0	0.8	A		○			４方向方形	Ⅲ期前半	西住1992	ほか３個体の完形品出土。写真のみの１点が26のように上下通しの方形
25			10号Ｂ溝４層	22.0	—	14.0	1.6	B		○			４方向方形・円形	Ⅲ期前半		櫛描き文が波状
26	宮ノ前遺跡Ａ	福岡県朝倉郡筑前町曾根田	大溝上層	25.8	20.8	10.8	1.2	A			○？		上下通し方形・２連の円形	Ⅲ期？	石橋2014	
27	長野フンデ遺跡	北九州市小倉南区大字長野	２区東側３a土坑	19.0	27.0	9.0	1.7	口縁部肥厚			○		３連円形４方向	後期後半	谷口2000	

（注１）深堀遺跡では「肥前型器台」は1964～65年に製パン工場建設に伴って行われた第二次調査のＢ区０層、旧婦人会館・深堀小学校地内のＤ区２層（小田富士雄他1967の呼称）から出土した。が、Ｂ区では中世貿易陶磁や石鍋に混じった０層出土であり、Ｄ区については調査経過も層位の位置付けも不明で、２層からは夜臼式、板付Ⅱ式土器も併出している。器台など特殊遺物の編年は理論的仮定を含む。

（注２）古代官道（西海道肥前路）は弥生時代から中世に連綿とつながるこうした在地の交通路から隔絶して、佐賀平野の北側の東西ルートから武雄盆地を南北に縦断して彼杵郡を目指すもので、既存集落を無視する直線ルートを指向し、結果的に現代の長崎自動車道のルートと駅・IC 位置まで合致することとなる（武部健一2005）。肥前国における律令国家の通時的な超越性が窺える。

（注３）宮﨑はⅢ期に多様な文様が共存する例を自らが担当した今福遺跡の出土例のみから挙げるが、佐世保市門前遺跡の弥生後期河川跡出土の器台破片（江上2006）も多様な位置の横方向ヘラ描き沈線文や「×」型の区画文など、同一時期のものと思われる。門前遺跡の遺構・遺物の中で、Ⅱ期の一括資料である二号祭祀遺構の６点の器台に次ぐ段階に位置付けられる。

（注４）みやこ遺跡の遺構配置図は報告書に掲載されておらず、調査の詳細には不明の点が多い。SK 324は長辺2.2m 深さ15～40cm を計る方形土坑であるとの情報（p92）のほかは位置も層位も不明である。他遺跡を含めた調査区配置図（ｐ８－10）並びに隣接調査区報告書（徳永貞紹編1994）によれば、河川の直線化を期した工事の対象となる河川屈曲部内側の滑走斜面に、みやこ遺跡Ⅲ区は位置した。弥生時代の旧流路に面した竹松遺跡の先述の墓域に共通した立地をもつ。現存しない遺跡だが、茂手遺跡を含め、未報告の遺物、遺構もこれら２遺跡には多く含まれるようであり、遺跡の存続期間、土器様式の展開過程の詳細など不明の点も残る。

（注５）沈線文が櫛描きかヘラ描きか、上半部の３個目の円形穿孔の痕跡はあるか、円形穿孔の方向性はどうなっているかなどは、透かしの意匠の構成案と共に未詳である。

参考文献

石橋新次「佐賀県における肥前型器台」『肥前型器台について』肥後考古学会・長崎県考古学会合同大会資料集2014（石橋2014a）

石橋新次編『宮ノ前遺跡Ａ・柏木宮ノ元遺跡』筑前町文化財調査報告書第17集2014（石橋2014b）

上田龍児「５考察（１）器台型土器について」（小田富士雄編『長崎県・景華園遺跡の研究　福岡県京都郡における二古墳の調査　佐賀県・東十郎古墳群の研究』福岡大学考古学研究室研究調査報告第３冊2004）

江上正高「弥生後期の河川跡」（副島和明編『門前遺跡』長崎県文化財調査報告書第190集2006）

小田富士雄「弥生土器」『深堀遺跡』長崎県文化財調査報告書第５集1967

小松譲「Ⅵ総括」『中原遺跡Ⅶ』佐賀県文化財調査報告書第199集2013

正林護・宮﨑貴夫「五反田遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅳ』長崎県文化財調査報告書第55集・1981

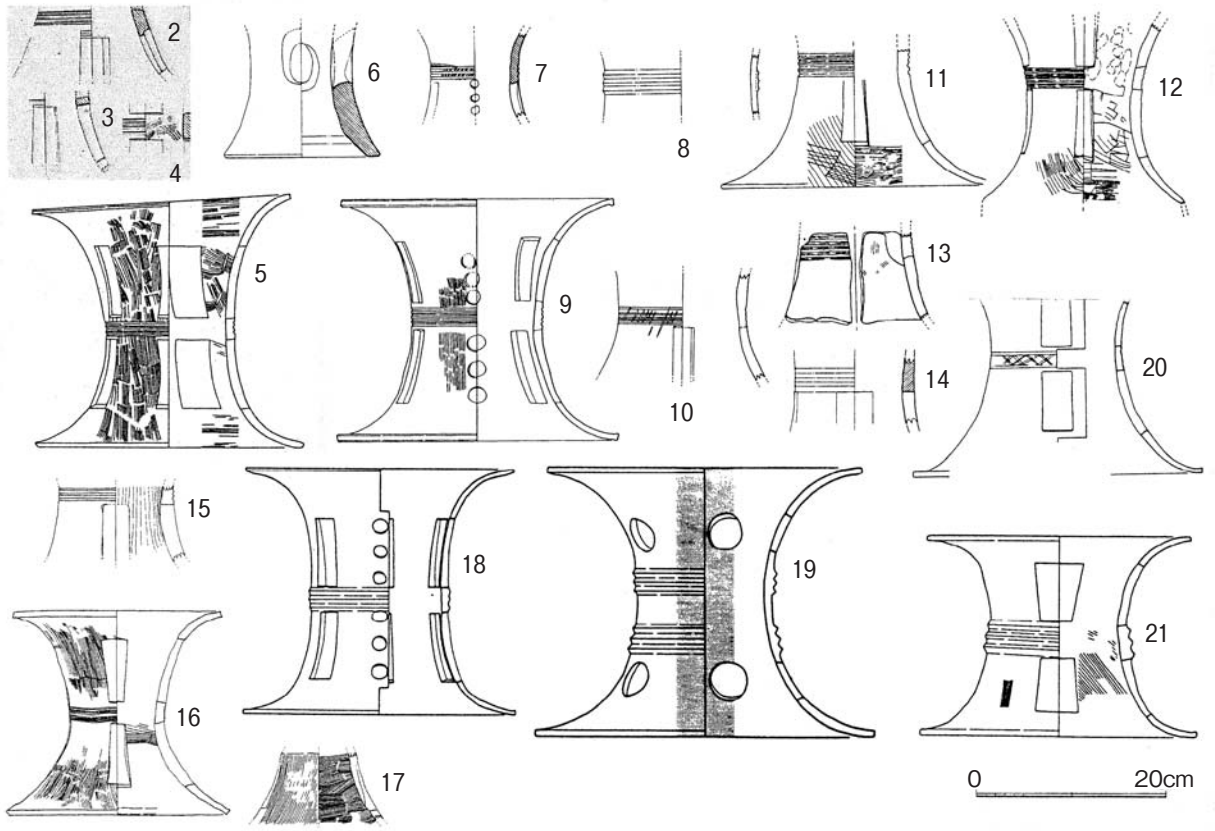
武部健一『続古代の道　完全踏査　山陰道・山陽道・南海道・西海道』吉川弘文館2005

田島陽子・川畑敏則「新幹線建設に伴う大村市竹松遺跡の調査」『平成26年度九州考古学会総会研究発表資料集』2014

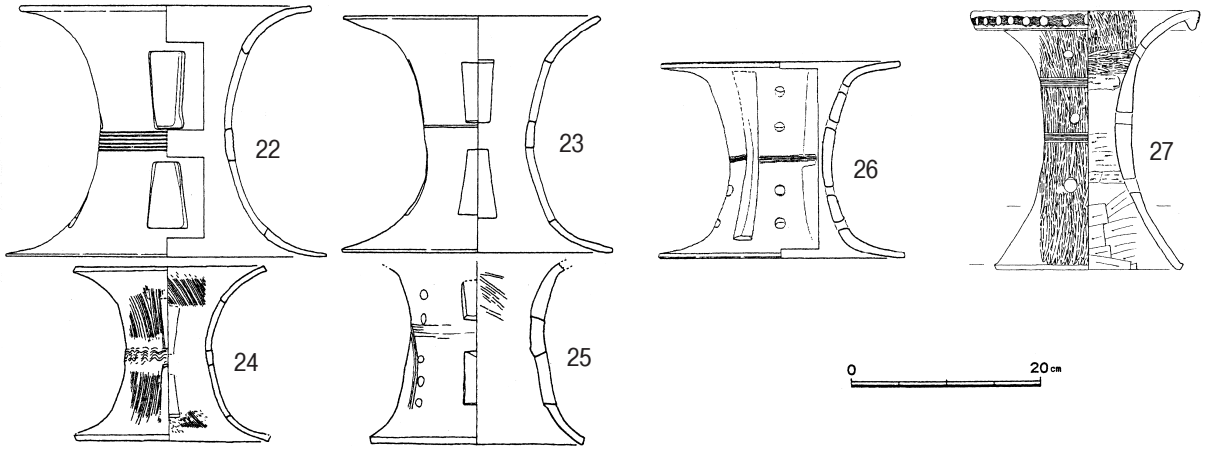
谷口俊治・中村利至彦編『長野フンデ遺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第252集2000

谷若倫郎「瀬戸内における東西の土器」（『弥生後期の瀬戸内海』古代学協会四国支部第10回松山大会発表資料集・1996）

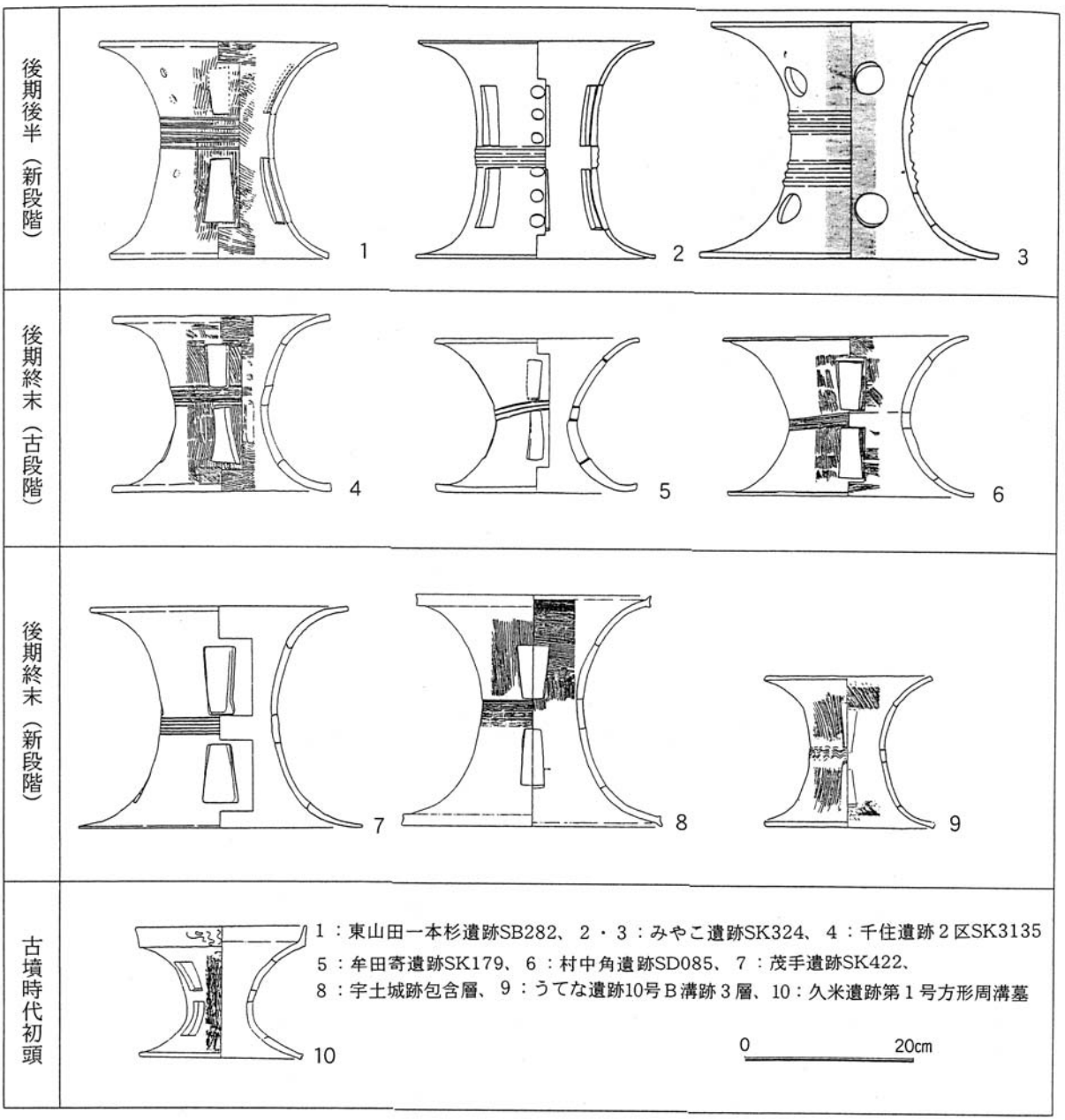
檀佳克「菊池川流域における「器台」について」『肥前型器台について』肥後考古学会・長崎県考古学会合同大会資料集2014
徳永貞紹編『東福寺遺跡』〔九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（17）〕佐賀県文化財調査報告書第121集1994
西住欣一郎『うてな遺跡』熊本県文化財調査報告第121集1992
服部英雄「肥前国長嶋庄の開発主体　―条里制耕地の復原と変遷―」（『史学雑誌』88－６・1979）（改稿して服部英雄『景観にさぐる中世』新人物往来社・1995に収録）
原田保則編「みやこ遺跡」『六角川河川改修工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』上巻・武雄市文化財調査報告書第15集1986
原田保則「透窓をもつ器台について」『六角川河川改修工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』下巻・武雄市文化財調査報告書第15集1986
樋口秀信・渋谷格他『東山田一本杉遺跡』〔九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(18)〕佐賀県文化財調査報告書第125集1995
町田利幸・宮﨑貴夫編『今福遺跡Ⅰ』長崎県文化財調査報告書第68集1984
町田利幸・宮﨑貴夫編『今福遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第77集1985
宮﨑貴夫「第２章総括Ⅱ　弥生土器ならびに古式土師器について」（町田利幸・宮﨑貴夫編『今福遺跡Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第84集1986）
宮﨑貴夫「肥前型器台および長崎県の状況について」『肥前型器台について』肥後考古学会・長崎県考古学会合同大会資料集2014



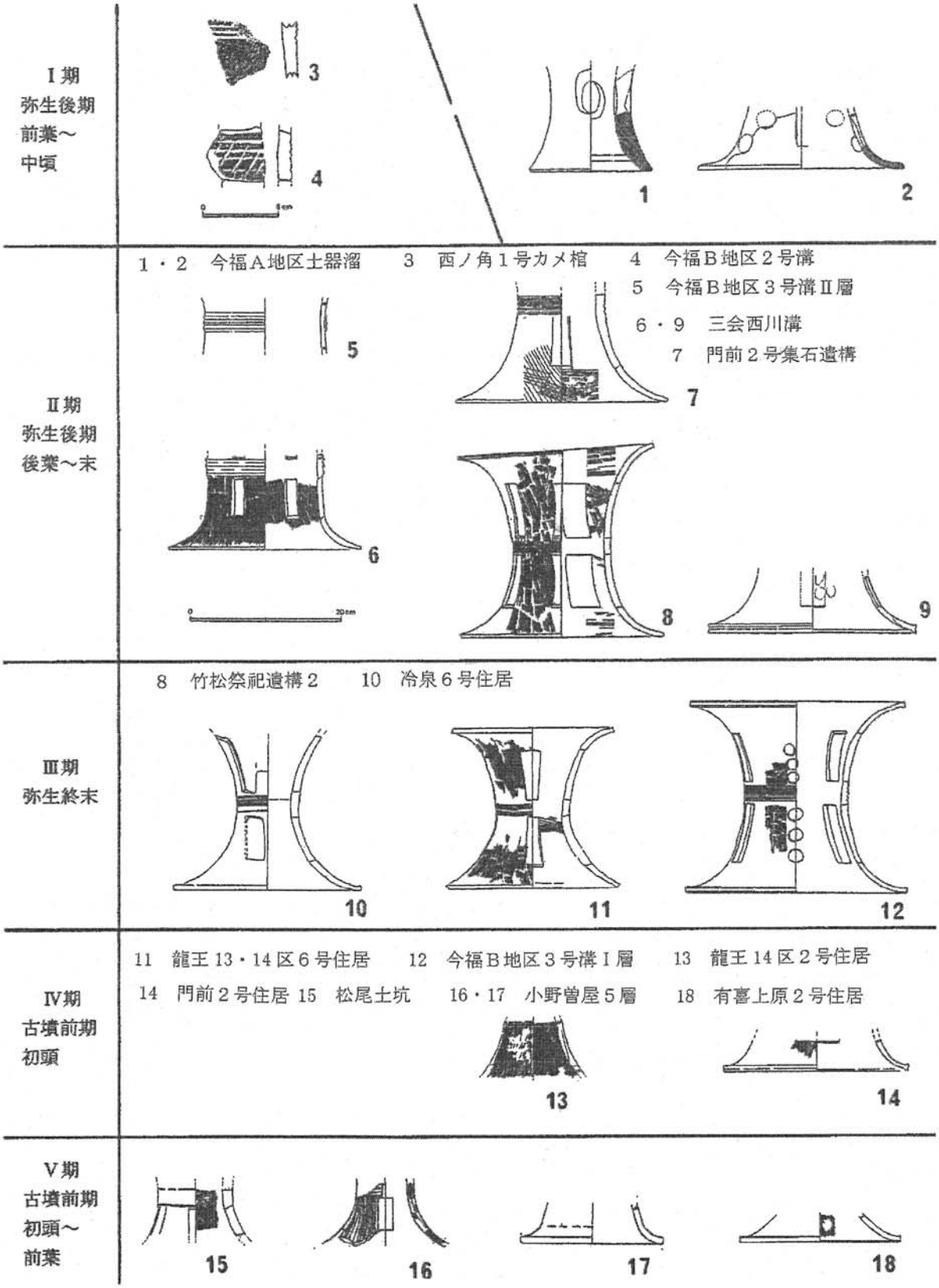
第14図　有明海周辺地域出土器台１（１／８）



第15図　有明海周辺地域出土器台２（１／８）



第16図　器台変遷図（上田2004）（１／８）



第17図　長崎県における肥前型器台の変遷案（宮﨑2014　一部改変）（1／8）

（3）石器

1～**4** は黒曜石製石鏃である。**1** は円基、**2**～**4** は凹基である。**5** は黒曜石製石錐である。**6** はサヌカイト製のスクレイパーで２辺を使用している。**7**・**8** は安山岩製磨石である。**9** は泥岩製の仕上げ用の砥石で３面使用している。**9**～**16**は安山岩製の打製石斧である。完形品はない。縄文時代晩期のものと思われる。

表５　３層出土石器観察表

図版番号	器種	出土地区	石種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)(　)は残存部重量	備考
1	石鏃	A 区7078	黒曜石	2.70	2.10	0.40	(1.84)	円基
2	石鏃	H 区7600	黒曜石	3.10	1.60	0.40	1.45	凹基
3	石鏃	J 区7600	黒曜石	2.70	2.00	0.40	(1.27)	凹基
4	石鏃	H 区7600	黒曜石	(1.70)	(1.50)	0.35	(0.81)	凹基片脚部
5	石錐	H 区7600	黒曜石	3.90	0.85	0.55	2.27	
6	スクレイパー	7498	サヌカイト	7.15	4.20	1.00	(30.00)	
7	磨石	H 区7600	安山岩	(6.90)	(9.30)	3.30	(290.00)	
8	磨石	H 区7400	安山岩	(7.00)	(10.10)	3.70	(350.00)	
9	砥石	J 区7600	泥岩	(5.30)	4.75	(1.10)	(45.00)	３面使用
10	打製石斧	7600	安山岩	(10.00)	8.20	1.00	(150.00)	基部
11	打製石斧	トレンチ１	安山岩	(8.70)	(7.10)	0.90	(65.00)	基部
12	打製石斧	H 区7600	安山岩	(9.50)	10.60	0.90	(100.00)	三角形の刃部
13	打製石斧	E 区7498	安山岩	(11.90)	(7.40)	1.30	(125.00)	基部
14	打製石斧	H 区7600	安山岩	(7.90)	11.80	1.85	(195.00)	刃部
15	打製石斧	H 区7600	安山岩	(11.80)	10.3	2.9	(430.00)	刃部　大型短冊型
16	打製石斧	H 区7600	安山岩	(17.50)	11.6	2.7	(430.00)	刃部～基部　大型短冊型

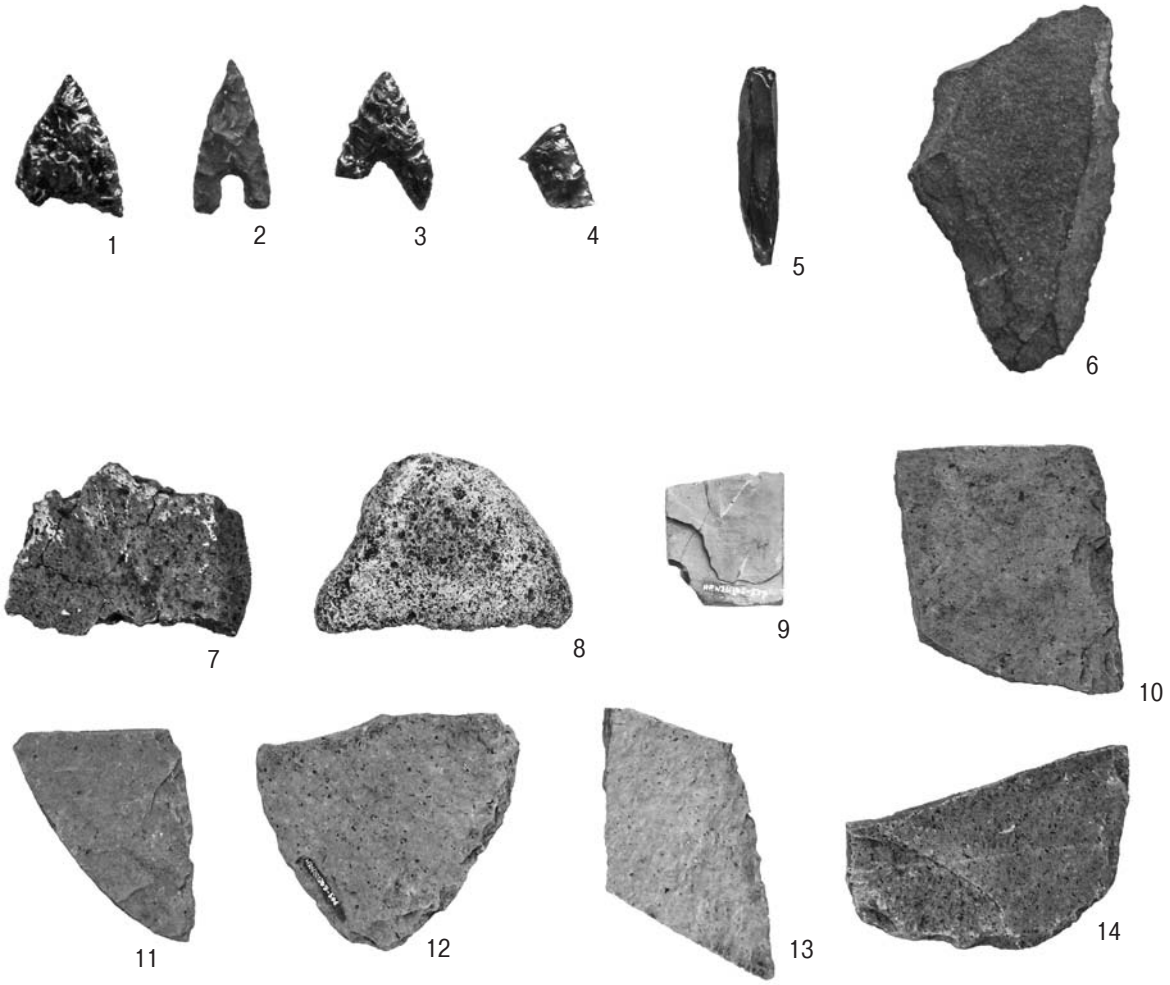
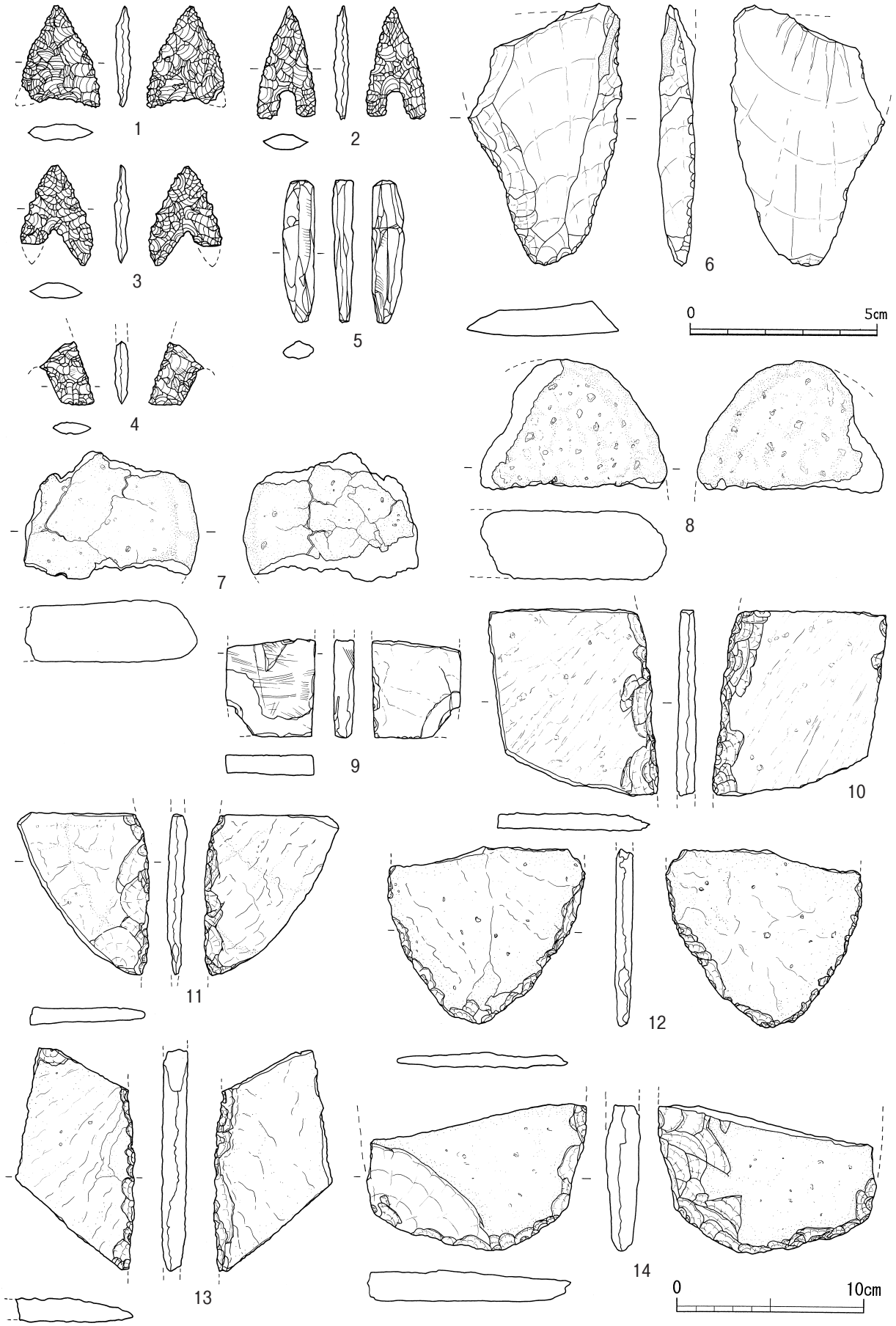
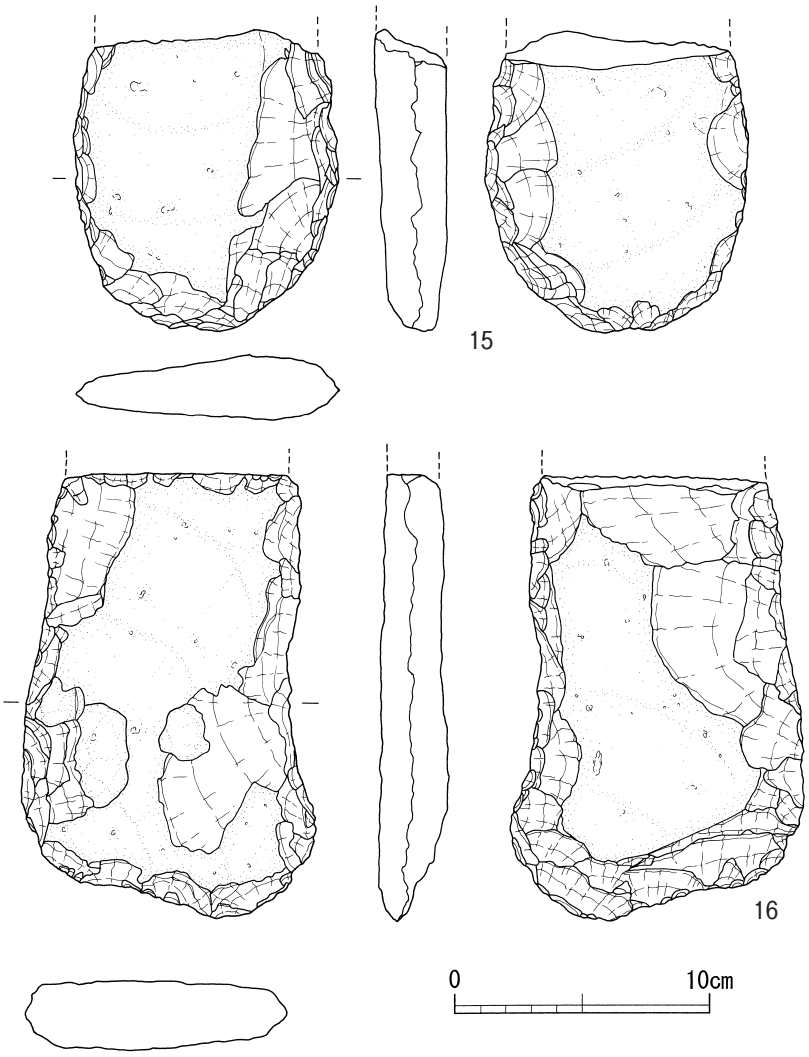


写真７　３層出土石器１



第18図　３層出土石器実測図１（１～６　２／３、７～14　１／３）



第19図　3層出土石器実測図2（1／3）

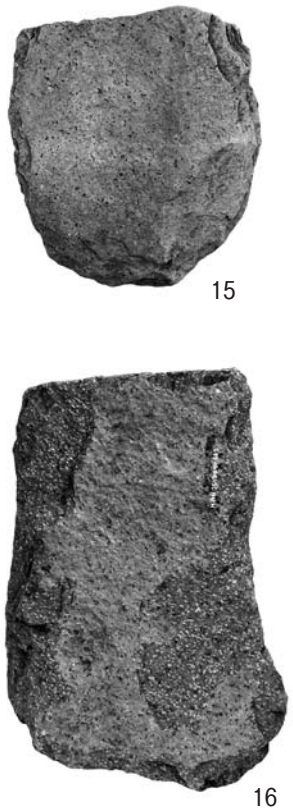


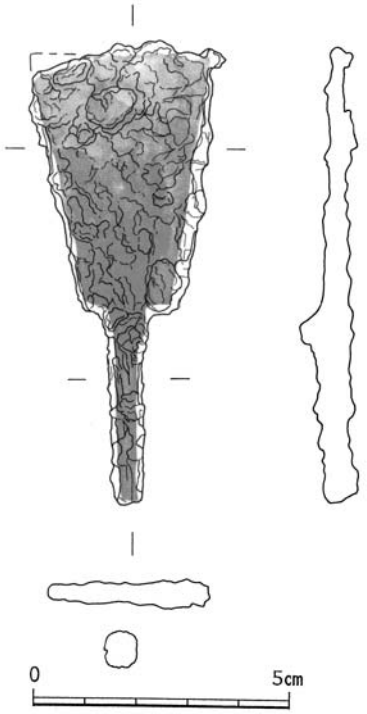
写真8　3層出土石器2

（4）鉄鏃について

河川堆積層より有茎鏃群方頭式（水野敏典2013）の鉄鏃が出土した。鏃身部平面形は方頭形で断面は片刃切造である。長さ9.2cm、幅3.9cmである。刃先がやや丸みをもつ。鉄鏃は大村湾近郊では小佐古石棺墓群、玖島崎古墳群などから出土している。なかでも有茎鏃群方頭式の鉄鏃の出土例は長崎県内では高下古墳、てぼ神古墳、柿の本古墳に続いて4例目である。また佐賀県、福岡県の類似品においても今回出土した鉄鏃は6世紀後半から7世紀前半のものと推定される。てぼ神古墳、柿の本古墳は大村湾を囲み、高下古墳は島原半島に位置するという位置関係は宇野が指摘する古墳終末期の石室玄室プランの変化と呼応する。石室玄室プランの変化は「島原半島から北の玄界灘沿岸まで7世紀に至っても1世紀後半以降引き続き地域間交流が行われお互いの情報を共有しあっていたからではないか」と宇野はいう（宇野2015）。有茎鏃群方頭式の分布は古墳終末期の石室玄室プランの変化と呼応するので島原半島から玄界灘沿岸まで交流が行われていたといえるのかもしれない。また朝鮮半島南部との関係がうかがえる高下古墳での鉄鏃について「有明海を挟んで肥前肥後に類似品をたどることができる」と小田もまた同様のことを指摘している（小田1969）。本鉄鏃の類似品も佐賀の仁田古墳群・東十郎古墳群、福岡の中原狐塚古墳・長野古墳群・黒谷古墳群でみられる。また佐賀の仁

田古墳群は唐津地方という土地柄大陸の情報が入り、対して東十郎古墳群は大宰府方面に通じる後の官道近くに位置するので、那津屯倉、筑紫大宰、大宰府と展開していくヤマト王権の九州出先機関の情報を得やすい。6世紀代の列島内での交流範囲が現在の長崎県、佐賀県、福岡県にあるようだと鉄鏃からうかがえる。くわえて有茎鏃群方頭式の東への伝播もうかがえる。

さて本鉄鏃が秦憲二の「同一地域で継続的かつ多くの古墳から出土する生産型式」、「他地域に同一型式の認められるもの搬入型式」、「そのうち広域にみられる広域分布型式」（秦2003）、いずれにあてはまるだろうか。本遺跡周囲の6世紀後半から7世紀の古墳は玖島崎古墳群、鬼の穴古墳、野田古墳群が該当するものの玖島崎古墳群出土の鉄鏃は有茎鏃群方頭式ではなかった。また鬼の穴古墳は江戸末頃から開口していたため副葬品は確認されていない。また野田古墳群からは鉄鏃は出土していない。これにより、すくなくとも本調査区周囲の「同一地域で継続的かつ多くの古墳から出土する「生産型式」」ではないことはいえるだろう。したがって今回出土した鉄鏃は「広域分布型式」にあてはまるので、交流の結果といえるのかもしれない。ではどういった交流があったのか。杉山は「朝鮮半島にも、高句麗・新羅系の遺物として方頭鏃が濃密に分布し、この時期には、半島全域に分布をみるようであり、朝鮮半島から九州地方を含めた、一大分布圏が形成される」（杉山1988）と指摘し交易が九州北部にとどまらないことをいう（杉山1988）。さらに朝鮮半島との軍事衝突によって半島の鏃が模倣された結果、北九州に有茎鏃群方頭式が生まれたのではないかとも指摘する（杉山1988）。ただ有茎鏃群方頭式は実戦にはむかない形状をしているから祭祀のためにつくられたようにもおもわれる。今回鉄鏃が出土した平野遺跡の立地として郡川が何度も流れを変え洪水、氾濫をおこし扇状地を形成した。今回の調査区には遺物は貯蔵や煮炊きの道具は少なく祭に使うことが多い高杯が多く出土している。また鉄鏃が出土した土層は河川とおもわれる。これらのことから今回の調査区は古代においては郡川の氾濫などの水害にたいする川鎮めの祭をおこなった場所だったのかもしれない。さらに、この地域に鉄鏃を入手できる交易ルートをもった集団がいたことは特筆に価する。



第20図　3層出土鉄鏃実測図（2／3）

写真9　3層出土鉄鏃X線写真

写真10　3層出土鉄鏃

表６　長崎・佐賀・福岡県における方頭式鉄鏃出土遺跡一覧

遺跡名	遺構	時期	その他	所在地	報告書名
大坂古墳郡	横穴式石室	６世紀末～７世紀前半	円墳	佐賀県唐津市浜玉町谷口、渕上	美浦雄二、藤原理恵『仁田古墳群Ⅰ』佐賀県文化財調査報告書第1832010
東十郎古墳群	横穴式石室	７世紀第３四半期		佐賀県鳥栖市神辺町東十郎から柚比町森塚	小田富士雄　下原幸裕『佐賀県・東十郎古墳群の研究』福岡大学考古学研究室研究調査報告第２冊2003
長野古墳群	横穴式石室	６世紀中～６世紀後半		福岡県八女市長野174－１･174－２･192－１	小田和利『長野古墳群』福岡県文化財報告書第158集2001
中原狐塚古墳	横穴式石室	６世紀後葉でもやや古い段階	装飾古墳 円墳	福岡県浮羽郡田主丸町大字中原	丸林　禎彦『中原狐塚古墳』田主丸町文化財調査報告書第26集2004
黒谷古墳群	横穴式石室	６世紀第３～第４四半期	装飾古墳	佐賀県鳥栖市三養基郡基山町	久山高史『黒谷・水呑古墳群』鳥栖北部丘陵新都市関係文化財調査報告書（1）　佐賀県教育委員会1993
高下古墳	横穴式石室	６世紀中葉～末	円墳	長崎県南高来郡国見町多比良字岩名町の351番地	小田富士雄『高下古墳調査報告』国見町教育委員会1969
てぼ神古墳	横穴式石室	７世紀代	円墳	長崎県佐世保市萩坂町	久山貞男「てぼ神古墳調査報告」『佐世保市文化科学館文化財報告』２　1972
柿ノ本古墳	横穴式石室	７世紀中葉ないし後半	円墳	長崎県南高来郡瑞穂町古部1430番地	正林護「柿ノ本古墳」『長崎県埋蔵文化財集報Ⅰ』長崎県埋蔵文化財調査報告書第35集1978

引用・参考文献

稲富裕和・橋本幸男『小佐古石棺墓群－Ｂ地点－』大村市文化財調査報告書第13集　1988

稲富裕和・橋本幸男『玖島崎古墳群』大村市文化財調査報告第17集1993

稲富裕和『寿古遺跡県営圃場整備事業福重地区寿古工区発掘調査概報』大村市文化財調査報告第15集1990

小田富士雄『高下古墳調査報告』国見町教育委員会1969

小田富士雄　下原幸裕『佐賀県・東十郎古墳群の研究』福岡大学考古学研究室研究調査報告第２冊　福岡大学人文学部考古学研究室2003

小田和利『長野古墳群』福岡県文化財報告書第158集2001

久山高史『黒谷・水呑古墳群』鳥栖北部丘陵新都市関係文化財調査報告書（1）　佐賀県教育委員会1993

久村貞男「てぼ神古墳調査報告」『佐世保市文化科学館文化財報告』２　1972

正林護　「柿ノ本古墳」『長崎県埋蔵文化財集報Ⅰ』長崎県埋蔵文化財調査報告書第35集1978

秦憲二　「南九州における古墳時代鉄鏃の様式構造」『先史学・考古学論究Ⅵ』　龍田考古会2003

藤田和裕「Ⅱひさご塚古墳・鬼の穴古墳・野田古墳」『長崎県埋蔵文化財集報Ⅲ』　長崎県埋蔵文化財報告書第50集1980

藤田和裕「第３章まとめ」『県内古墳詳細分布調査報告書』長崎県埋蔵文化財報告書第106集1992

藤田和裕「長崎県の古墳文化」『原始・古代の長崎県　通史編』長崎県教育委員会1998

丸林禎彦『中原狐塚古墳』田主丸町文化財調査報告書第26集　2004

美浦雄二・藤原理恵『仁田古墳群Ⅰ仁田古墳群１区・２区・３区・矢作遺跡４区・下新田古墳群・大坂古墳群』佐賀県文化財調査報告書第183集（西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書（8））2010

宇野愼敏「肥前西部の古墳時代後･終末期古墳にみる地域間交流」『故高野晋司氏追悼論文集』2015

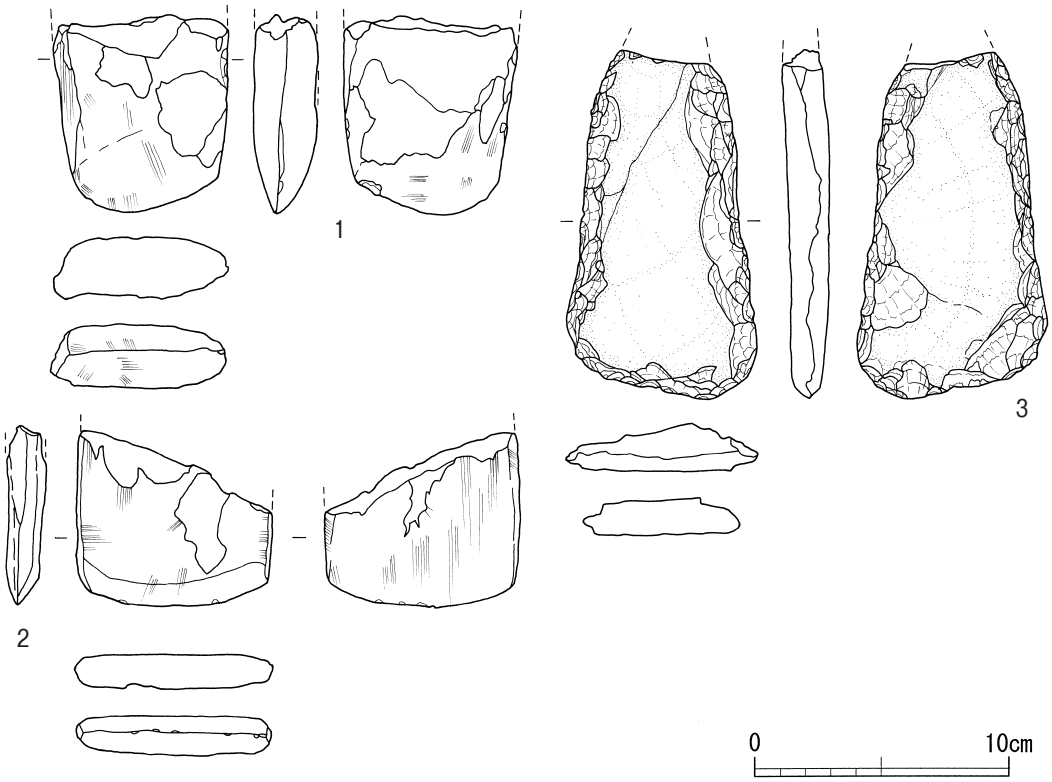
杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」（橿原考古学研究所編『橿原考古学研究所論集第８』吉川弘文館1988）

水野敏典「金属製品の型式学的研究　鉄鏃」『古墳時代の考古学』４巻　同成社2013

3　4層の遺物

（1）石器

1は蛇紋岩製の磨製石斧である。刃部の形状は両刃である。全面に丁寧な研磨をほどこす。**2**は蛇紋岩製で薄く扁平な磨製石斧である。刃部の形状は片刃である。全面に丁寧な研磨をほどこす。**3**はややバチ型で薄く扁平な安山岩製の打製石斧である。刃部の形状は両刃である。加工は周縁に限られ自然面が大きく残る。権現脇遺跡打製石斧Ｂ類に相当する。どれも縄文晩期に相当すると思われる。



第21図　4層出土石器実測図（1／3）

写真11　4層出土石器

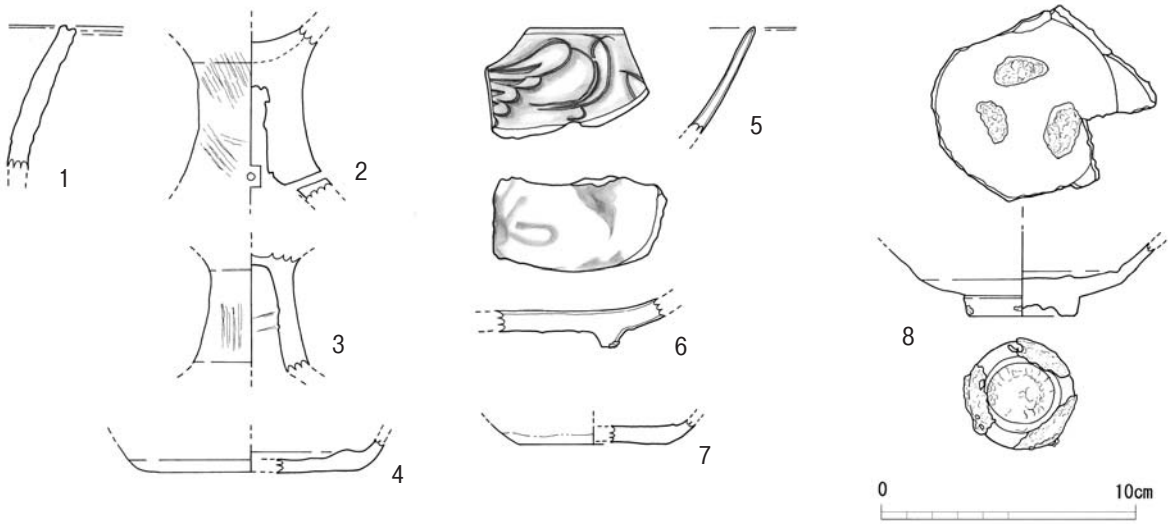
表7　4層出土石器観察表

図版番号	器種	出土地区	石種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)(　)は残存部重量	備考
1	磨製石斧	D区7200	蛇紋岩	7.8	6.9	2.5	(180)	刃部
2	磨製石斧	D区7298	蛇紋岩	7.1	7.7	1.6	(100)	扁平　刃部
3	打製石斧	F区7498	安山岩	13.7	7.45	1.85	205	扁平

4　出土層位不明土器

1 は口縁が直線的に外反する砲弾形の深鉢である。内外面ともにヨコ方向の貝殻条痕を施されている。また内面の屈曲部を条痕の後ナデている（口唇部を面取りした後に条痕を施している。その結果口唇部に凹線がはしる）。**2** は高杯で脚部裾に３箇所穿孔が見られる。**3** は土師器の高杯で脚部はラッパ状に開いていくと思われる。また全面に磨耗が激しい。 **4** は底部から口縁にかけ内湾気味にひらく土師質の小皿である。底部は磨耗のため切り離しは不明である。11世紀代の資料と推定される。

5 は口縁部のみ残存する龍泉窯系碗である。外面は無紋で内面は片切り彫りによる劃花文である。（鎌倉時代の資料と推定される） **6** は底部から体部最下半が残存している漳州窯系青花皿である。畳付に砂目痕がみられ外面の高台際に１条の圏線がみられる。 **7** は底部のみ残存する白磁皿である。平底の底部は施釉されておらず糸切り離しまたは一部ヘラ切り離しがみられる。 **8** は底部から体部下半が残存し内湾気味にひらく朝鮮系陶器碗である。左回転の削りだし高台で高台裏に３つの目痕がみられ見込みに３つの砂目痕がみられる。



第22図　出土層位不明土器実測図（１／３）

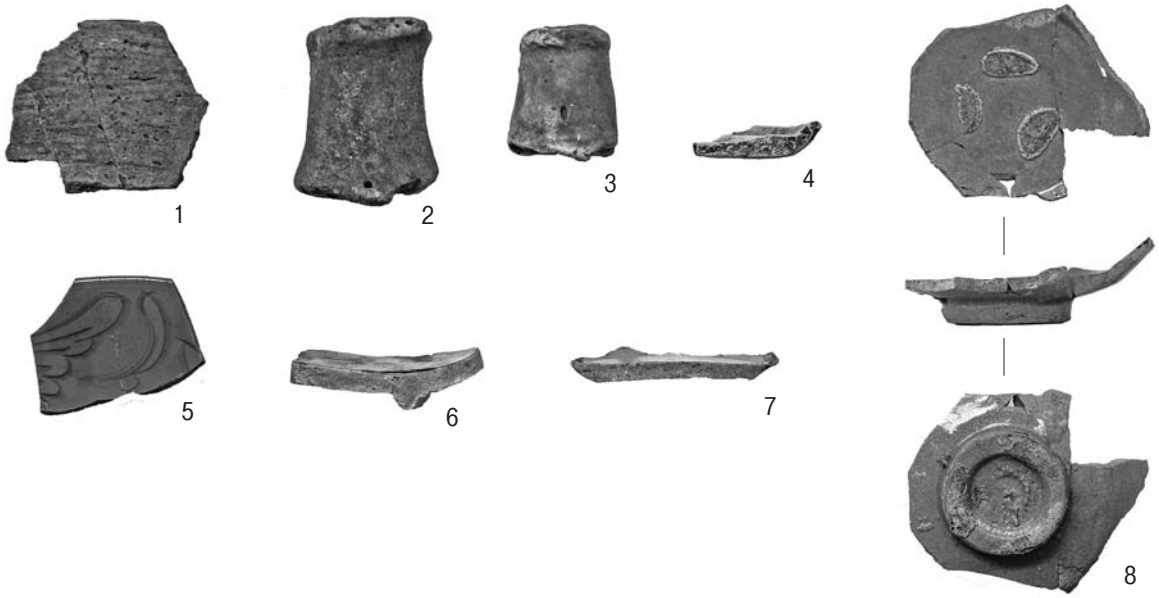


写真12　出土層位不明土器

表８　出土層位不明土器観察表

図版番号	調査区	器種	部位	調整		色調		焼成	胎土	備考
				内面	外面	内面	外面			
1	表採	粗製深鉢	口縁	貝殻条痕	貝殻条痕	黒褐色	明黄褐色	良好	砂粒多く含む	縄文晩期
2	トレンチ１	高杯	脚部	ハケ　ナデ	ハケ　ナデ	明褐色	明褐色	良好	微細な砂粒まばらに含む	裾に３ヶ所穿孔あり
3	トレンチ１	高杯	脚部	ヘラケズリ ナデ	ハケ　ナデ	灰褐色	黄褐色	良好	微細な砂粒まばらに含む	土師質　全面にローリングを強く受けて磨耗している
4	トレンチ４	土師皿	底部	ナデ （ハケ？）	ナデ （ハケ？）	黄褐色	黄褐色	やや甘い	微細な砂粒まばらに含む	ローリング受けている
5	表採	青磁碗	口縁	－	－	－	－	良好	精緻	龍泉窯系　内面に片切彫りによる劃花文
6	Ａ区7098	皿	底部	－	－	－	－	良好	微細な黒色粒まばらに含む	彰州窯系青花　高台に砂目痕　内外面貫入
7	Ｄ区7298	白磁皿	底部	－	－	－	－	良好	微細な黒色粒まばらに含む	底部無釉　見込みに圏線　　底部薄く糸きり一部ヘラきり
8	Ａ区7098	碗	底部	－	－	－	－	良好	精緻	朝鮮系陶器　黄ば釉　左回転ろくろで削りだし見込みに３つの砂目痕　高台裏に３つの目痕

Ⅴ　まとめ

今回の調査では、阪口和則氏が『新編大村市史』のなかで述べられている郡川の阪口から放射状に流れる旧河道のひとつが調査区を南南東から北北東に流れていたことが確認できた。その旧河道に堆積した黒色腐植土の３層からは縄文時代晩期から近世に至る遺物が出土した。河川に堆積した遺物とは言え、この旧河道の付近で縄文時代晩期から近世まで人々の生活が営まれていたことを物語るものである。３層の遺物出土状況で特徴的なのが弥生時代末と考えられる高杯や器台などの供膳具が多く出土し、壺や甕といった人びとの定住を思わせる貯蔵・煮炊具の出土は少ない。また、古墳時代後期のものと見られる方頭式鉄鏃が出土した。これらのことから、弥生時代末と古墳時代後期にこの旧河道沿いに祭祀・宗教的な場所や施設があったものと想像できる。４層からは縄文時代晩期の打製石斧や土器が出土し、この層が当時の生活の場であったと言える。

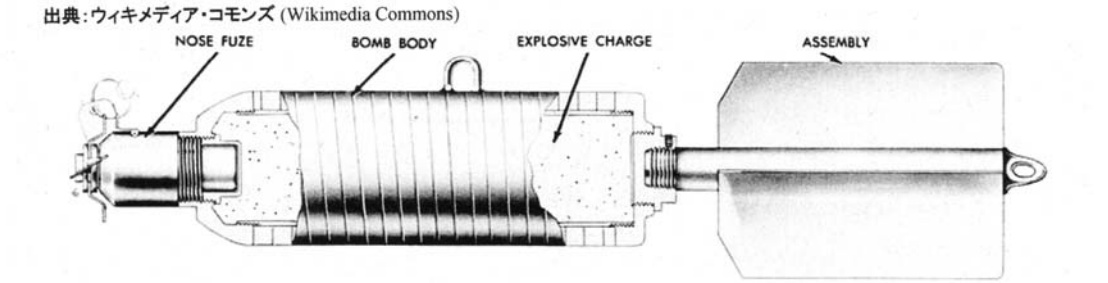
さらに、埋蔵文化財とは違うが太平洋戦争当時の不発弾が多数出土したことは、戦争末期の鬼橋方面へのアメリカ軍の空爆の激しさを今に伝えるものである。

参考文献

阪口和則「旧河道について」『新編大村市史』第一巻第一章第四節第七項2014

Ⅵ　附編　調査区出土の不発弾について

1　調査区出土不発弾

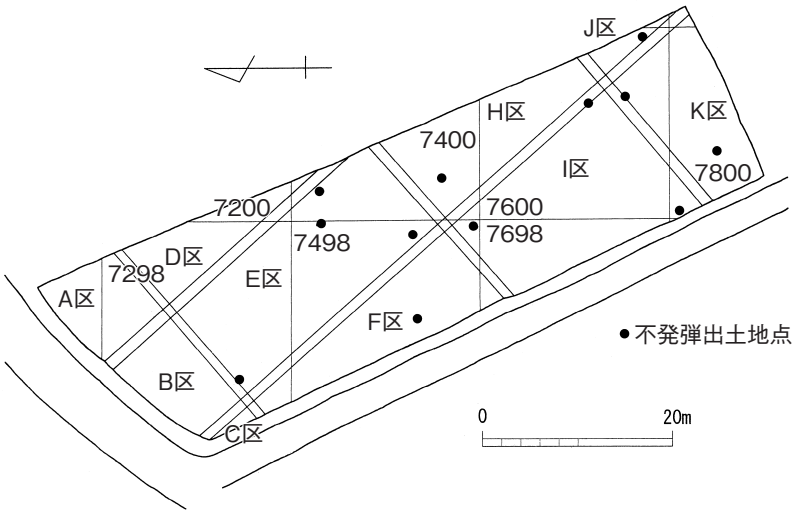


第23図　AN−M41　20ポンド破砕爆弾

今回の調査で不発弾13個体が、12箇所で出土した。羽の部分を中心にほぼ全体が残存しているものもあった。すべて太平洋戦争中にアメリカ軍が投下したAN−M41、20ポンド破砕爆弾であった。直径93㎜、重さ９kg、炸裂容器に幅12㎜、厚さ９㎜の矩形断面軟鋼を螺旋状に巻いた構造である。通常は抱締器に６発を入れ、投下する。投下されると地上約300m で締結帯が外れ、６個の爆弾が地上に向かって落下する。その際、信管の風車の風車止めの針金が抜けて風車の回転が減速され、安全片を固定している筒が徐々に内に引き込み安全解除となり、地上に落ちると爆発する。この時、螺旋状の軟鋼が寸断され、10cmほどの破片となって飛散する。この安全解除がうまく作動しないと不発弾となる。知らずに羽を動かすと爆発する。

写真13　調査区出土不発弾

写真14　不発弾出土状況（Ｅ区４層）



第24図　不発弾出土位置図（１/800）

2　大村の軍事施設の展開

大村に軍事施設が設置されたのは1896年（明治29年）の陸軍歩兵第二三旅団司令部の開庁に始まる。翌1897年（明治30年）歩兵第四六連隊が放虎原に駐屯する。その後1940年（昭和15年）に歩兵第一四六連隊補充隊（西部第四七部隊と呼称）が置かれる。

海軍は、1922年（大正２年）に海軍航空隊が設置される。1929年（昭和４年）からは佐世保鎮守府所属の航空母艦「加賀」の訓練基地となる。最盛期には艦上戦闘機約360機、陸上戦闘機約140機、人員約2000名を数える基地となる。大戦末期には1944年（昭和19年）にＢ29迎撃を任務とする三五二航空隊いわゆる草薙隊が設置され、翌1945年（昭和20年）５月５日には大村航空隊が解隊され、本土防衛のための第二〇二、三五二、三四三航空隊が編成された。

第25図　遺跡周辺軍事施設図（１/50,000）

また、1941年（昭和16年）に佐世保海軍工廠が日宇の海岸を埋め立て航空機工廠を設置しようとしたが地盤が軟弱だったため、急遽大村に第二十一海軍航空廠が開設された。工場住宅も含めると総面積約114万1000坪、総員約５万名を誇る東洋一の航空機生産庁となった。零式観測機、零式戦闘機、96式戦闘機などが生産された。

3　大村への空爆

アメリカ軍による大村への空爆は、アメリカ軍の侵攻により、まずは中国の成都からＢ29による空爆が1944年（昭和19年）７月８日から翌1945年（昭和20年）１月６日まで行われる。特に1944年（昭和19年）10月25日の大村大空襲では航空隊、航空廠は大打撃を受け、航空機を鬼橋方面に掩体壕等を造り避難、隠蔽した。1945年（昭和20年）３月27日、31日にはマリアナからのＢ29の爆撃を受けた。さらに、沖縄が侵攻され、1945年（昭和20年）７月５日、９日、30日と沖縄からＢ24、Ｂ25、Ａ26による空爆を受けた。この沖縄からの空爆はアメリカ軍に鬼橋方面への航空機、基地機能の避難が知れることとなり、鬼橋方面への空爆が激化した。７月30日の空爆がアメリカ軍の記録によると、破砕爆弾を使用しており、今回の遺跡から発見された不発弾の可能性が高い。

表９　成都からの空爆

日付	機数	攻撃目標
1944年（昭和19年）７月８日	17	長崎・佐世保・大村
1944年（昭和19年）８月20日	80	八幡製鉄所・倉幡・佐世保・長崎・大村
1944年（昭和19年）10月25日	56	大村海軍航空廠・長崎・佐世保・大村
1944年（昭和19年）11月11日	29	大村海軍航空廠・長崎・佐世保・福岡
1944年（昭和19年）11月21日	109	大村海軍航空廠・佐賀・大牟田・熊本
1944年（昭和19年）12月19日	40	大村海軍航空廠
1945年（昭和20年）１月６日	80	大村

表10　マリアナからの空爆

日付	機数	攻撃目標
1945年（昭和20年）３月27日	161	太刀洗飛行場・大分飛行場・大村海軍航空廠
1945年（昭和20年）３月31日	149	太刀洗機械工場・大村飛行場施設

表11　沖縄からの空爆

日付	機数			攻撃目標	備考
	B24	B25	A26		
1945年（昭和20年）７月５日	機数不明	25		大村飛行場	
1945年（昭和20年）７月９日	機数不明			大村飛行場	
1945年（昭和20年）７月30日		27	31	大村飛行場	破砕爆弾

参考文献

第二十一海軍航空廠殉職者慰霊塔奉賛会『放虎原は語る』大村市1999
空襲、戦災を記録する会全国連絡会議空襲通信編集委員会『空襲通信』第６号2004
『空襲通信』第９号2007
『空襲通信』第10号2008
小山仁示訳『米軍資料　日本空襲の全容　マリアナ基地Ｂ29部隊』1995
平塚柾緒『米軍が記録した日本空襲』1995

資料提供　日本物理探鑛株式会社

写真15　作業風景 1

写真16　作業風景 2

表12　九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査履歴

年度	遺跡名	業者名	調査面積（㎡）	委託期間
平成22年度	尾和谷城跡（OWA201005）	（株）島田組	720	1／6～3／25
平成23年度	尾和谷城跡（0WA201101）	（株）イビソク	1,594	4／11～6／30
	竹松遺跡（TAK201108）	（株）埋蔵文化財サポートシステム・扇精光（株）（JV）	1,500	11／7～3／2
平成24年度	竹松遺跡（TAK201202）	大成エンジニアリング（株）長崎営業所、（株）創建（JV）	〔10000〕終了面積 9,000	5／18～3／1変更～3／15
	竹松遺跡（TAK201208）	扇精光（株）・（株）三基（JV）	〔5000〕終了面積 6,300	8／31～3／14
	中田遺跡（NAK201205）	直営	88	7／23～8／23
	専岩遺跡（SEN201206）		212	
平成25年度	竹松遺跡（TAK201301）	国際文化財（株）長崎営業所・（株）大信技術開発（JV）	11,500	5／27～1／15
	竹松遺跡（TAK201302）	大成エンジニアリング（株）長崎営業所・（株）創建（JV）	〔13000〕終了面積 13,557	5／27～3／18
	竹松遺跡（路線）（TAK201303）	扇精光（株）・（株）三基（JV）	〔5340〕終了面積 4,720	5／27～12／17変更～3／14
	竹松遺跡（TAK201304）	（株）埋蔵文化財サポートシステム長崎支店・（株）大信技術開発（JV）	〔9000〕終了面積 9,900	6／27～2／4変更～2／24
	平野遺跡（HRN201305）	大成エンジニアリング（株）長崎営業所	1,700	6／26～10／15
平成26年度	竹松遺跡（TAK201405）	大成エンジニアリング（株）長崎営業所・（株）創建（JV）	〔7,900〕変更9,487	5／28～1／21変更～2／27
	竹松遺跡（TAK201404）	国際文化財（株）長崎営業所・（株）三基（JV）	7,720	5／30～2／10
	竹松遺跡（TAK201407）	（株）大信技術開発・（株）プロレリック（JV）	〔6,010〕変更6,876	7／1～2／9変更～3／6
	竹松遺跡（TAK201406）	（株）島田組・扇精光（株）（JV）	4,920	7／3～2／9
	竹松遺跡（TAK201403）	（株）埋蔵文化財サポートシステム長崎支店・扇精光（株）（JV）	6,320	5／28～10／20
平成27年度	竹松遺跡（TAK201501）	国際文化財（株）長崎営業所・（株）三基（JV）	4,400	5／29～1／20
	竹松遺跡（TAK201502）	（株）大信技術開発・（株）プロレリック（JV）	2,800	5／29～1／7
	竹松遺跡（TAK201506）	国際文化財（株）長崎営業所・（株）三基（JV）	2,180	8／5～2／19
	上三反田遺跡（KST201517）	（株）大信技術開発	275	1／12～2／26
平成28年度（7月時点）	一里松遺跡（ICH201601）	（株）大信技術開発	580	4／18～6／20
	三城城下跡（SJK201602）	大成エンジニアリング（株）長崎営業所・（株）創建（JV）	1,470	5／25～8／26
	竹松遺跡（TAK201604）	国際文化財（株）長崎営業所・（株）三基（JV）	2,300	6／20～10／11

〔　〕は当初契約の面積

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ひらのいせき
書 名	平野遺跡
副 書 名	九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	Ⅱ
シ リ ー ズ 名	新幹線文化財調査事務所調査報告書
シリーズ番号	第２集
編 著 者 名	浦田和彦・堀内和宏・東郷一子
編 集 機 関	長崎県教育委員会
所 在 地	〒850－8570　長崎県長崎市江戸町２番13号　TEL095－824－1111
発 行 年 月	西暦2017年２月

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平野遺跡（ひらのいせき）	長崎県（ながさきけん） 大村市（おおむらし） 鬼橋町（おにはしまち）120番地（ばんち） １他	42205	088	32° 56′ 51″	129° 56′ 57″	20130626～ 20131015	1,700	九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）路線部建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平野遺跡	包含地	・縄文 ・弥生 ・古墳 ・古代 ・中世	・旧河川跡	・縄文土器 石器 扁平打製石斧 ・弥生土器 肥前型器台 ・方頭式鉄鏃 ・土師器　高杯 須恵器 ・刻書土器 ・滑石製石鍋 ・青磁　白磁 明青花	

新幹線文化財調査事務所調査報告書　第２集
九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

平 野 遺 跡

平成29(2017)年２月発行

発行者　長 崎 県 教 育 委 員 会
〒850－8570　長崎市江戸町２番13号
TEL　095－824－1111

印刷所　株式会社　昭 和 堂
長崎県諫早市長野町1007－２
TEL　0957－22－6000